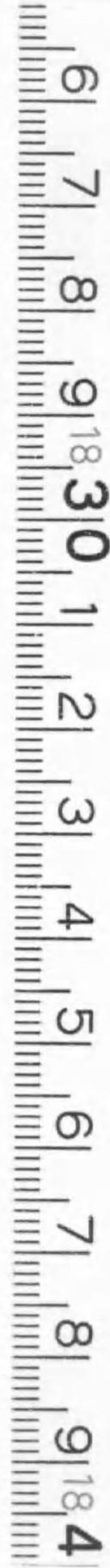
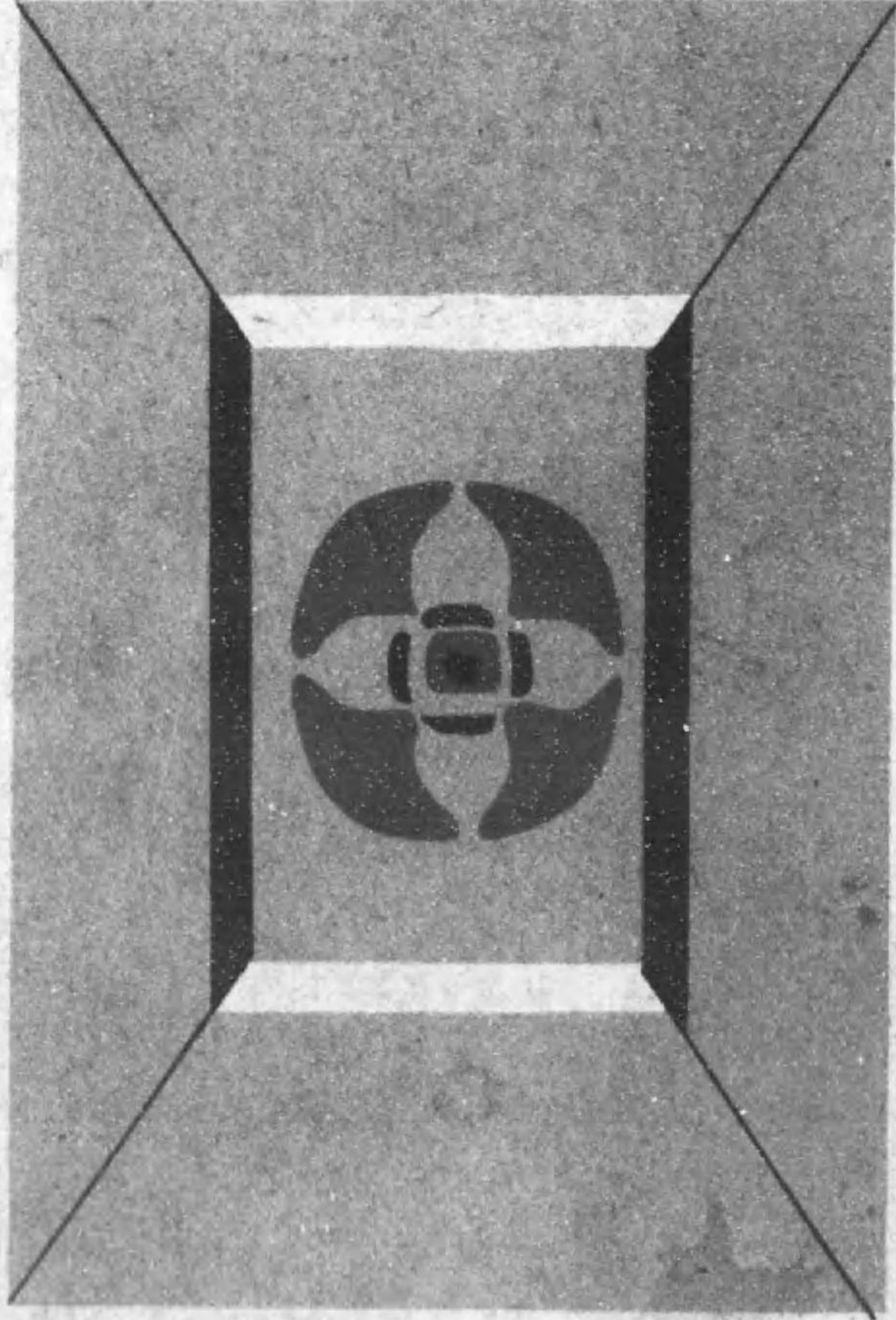


愛する者の道

中村武羅丈著



始



特 216
846



中村武羅夫著

愛する者の道

野島書店刊



愛あいする者ものの道みち

女人哀歌にょじんあいか—悲戀ひれん哀哭あいきくの卷まき

愛する者の道 目次

—— 女人哀歌——悲戀哀哭の卷——

罪を審判く權利……………	一
人の性は善なり……………	二
誰が盗んだのか？……………	三
人を見る明……………	三
卒倒……………	七
家庭教師……………	八
貴族の家……………	空
海と闘ふ者……………	穴
恐ろしき出来事……………	凸

女とは.....	100
湖上にて.....	114
男の情熱.....	115
別荘の客.....	114
黒い人影.....	114
毒蜘蛛の網.....	115
奇蹟.....	114
女の敵意.....	119
三原山の煙.....	111
愛人の問題.....	113
絶好の機会.....	113
美登里の希望.....	116
受難の日.....	119
崩れゆく虹.....	117
華麗な夢.....	110

男の良心.....	113
處女の夢.....	110
監禁と追放.....	113
ロメオの如く.....	116
暗い夜道.....	116
遁走二段飛び.....	118
遅い歸り.....	111
身邊の花.....	110
女給になつて.....	111
マダムと役者.....	113
女ひとりの部屋.....	113
戀の犠牲.....	115
霧の夜道.....	117
生か？死か？.....	119
覺めて見れば.....	110

結婚の條件……………四二
歸りなん、いざ！……………四二

悲戀哀哭の卷

罪を審判く權利

頬にポタリと、冷たい滴——

(雨かな?)と思つて、寝ぼろけ眼で、空を見上げると、降るやうな星の光り。

頭上に椎の梢が、眞黒に茂つたのが、ちやうど青葉の天蓋のやう擴がつて、夜露を除けてくれると思つたのに、葉末を傳ふ露だつたのである。

(これはイケない。)

と思つたが、今更、動き出すのは、憶劫だつた。

いかにせん頼むかけとて立寄れば

なほ袖ぬらす松の下露

眠い／＼頭に、ふとその歌を思ひ出したが、それから何を考へるといふのでもなく、すぐに忘

れてしまつた。背中を寄せかけてゐるコンクリートの高い塀の下に、まるで犬のやうに縮こまつて、そのまゝ前後も知らず、さながら引き入れられるやうに、昏々と眠つてしまつた。

慎之助は、そこが何んといふところか、東京の中心から、どつちの方角になつてゐるのか、そんなことは、ちつとも知らなかつたし、また、知る必要もなかつた。——行きあたりばつたり、當てもなく歩いて、歩きくたびれて、一步も足がすゝまなくなつたところで、そこでバツタリ倒れるやうにして、眠つてしまふ。

イヤ、眠るといふよりも、歩き疲れて倒れてゐるうちに、夜が明けてしまふのである。

夜が明けると、追つ立てられるやうな氣持で、疲れ切つた身を起し、また、行方も定まらずに歩き初める。——行く先々で、どこでも職を求めたのであつたが、どこにも職がなかつた。

工場に行つて、職工の口も求めて見たし、商店に行つて、小僧の口も探して見た。一品洋食屋のゴックの下働きから、蕎麥屋の出前持ち、人夫の口から、土工の口までも、あさり歩いて見たけれども、どこでも、慎之助一人の働く口を、與へてくれようとはしなかつた。

或るところでは、保証人がなくては駄目だと撥ねつけられたし、或るところでは、慎之助の身體や、風貌を一眼見るなり、まるで乞食でも追つばらふ時のやうに、手を振られてしまつた。

もちろん慎之助としては、どんな苦勞も、どんな困難も、辛抱するつもりだつたし、どんな恥

辱にも、蔑みにも、堪へ忍ぶ覺悟だつた。

それは故郷から逃げ出す時に、豫め覺悟してゐたところである。——東京に出る以上、學校時代の友人なども、あまり當てにはならないし、職業の口なども、自分を待ち受けるやうにして、いくらでも轉がつてゐるなどと、そんな甘い考へで出て來たわけでは、決してなかつた。

しかし、實際に東京に出て來て見ると、豫て慎之助が覺悟してゐたよりも、もつとひどかつた。その困難は更に幾十倍したし、その艱難は、更に幾百倍、はげしいものと言はねばならなかつた。

學校時代の友達も、三人ばかり訪ねて見たけれども、その度びに失望し、口惜し涙に暮れなければならなかつた。——學校時代には、特別親しくしてゐた友人でも、境遇もちがへば、身分も異なる今では、昔と同じやうな友情や、深切を求めるのは、求めるはうが、或ひは無理かも知れなかつた。

慎之助は、昔の友情に頼つて、人の深切や、情けを求めるのは間違ひだといふことを、つくづく覺らなければならなかつた。

それは決して、慎之助の僻みばかりではなかつた。

(イザといふ場合には、あんなに將來を誓ひ合つた愛人ですら、自分を裏切つて、平氣でゐるで

はないか。)

と思ふと、友人の冷淡なことくらゐ、責められなかつた。

(人を頼り、信じてることが間違ひだ！ 人間は、やつぱり自分一人だ。生きるのも、死ぬのも、一人だ。)

その考へ方は、或ひは間違つてゐるかも知れない。

しかし、その場合の慎之助としては——愛人には裏切られ、親友と信じてゐた友人からは、三人が三人とも、冷淡に扱はれた慎之助としては、さう思ひ込むのも、無理はなかつた。

それからの慎之助は、決して二度と、友達など訪ねようとはしなかつた。——どんなに困つても、自分一人で、職業を求めて廻つた。

食べることが出来なければ、食べないでゐたし、寝るに家がなければ、仕方がなく野宿をした。

二

もう三晩といふもの、畳の上で寝たことがなかつた。

一夜は公園のベンチで、警官に何度か追はれながら、やうやく夜を明かしたし、昨夜は、どこかの神社の床の下で、それでも朝まで、ぐつすり眠つた。

第三夜目の野宿は、慎之助自身にも、どこだかわからない。——夜中の二時近くまで、歩きまはつてゐるうちに、或る大きな屋敷の傍に來てゐた。兩側とも、長い、高い塀がつゞいてゐるし、あたりに街燈の光りも見えず、眞暗である。しばらく立つて見てゐても、人通りもない。

もちろん警官なども、巡廻して來さうもないし、ちやうど片側のコンクリートの塀の上から、椎の梢が往來まで延び出して、こんもりと傘のやうに枝葉を茂らせてゐるのを見ると、慎之助は窟窿な野宿の場所を、神から恵まれたやうな氣がした。

(こゝなら、ちやうど夜露は凌げるし、工合がいい。)

と思つて、家根のやうになつてゐる椎の梢の下、コンクリートの塀に背中を凭れ、乾いた地べたに腰を下ろした。

お晝すこし前に、食パンを半斤食べて、水を飲んだだけだつた。お腹はペコペコに空いてゐるにもかゝはらず、疲れ切つて、くたくになつてゐる身體は、地べたに腰を降ろして、塀に背中を凭れたと思ふ間もなく、何んにも知らずに、ぐつすり寝込んでしまつたのである。

椎の葉末をこぼれる夜露の滴に頬を打たれて、ふと眼をさましたと思つたのも束の間、すぐにまた、昏々として眠つてしまつたが、それから凡そどれくらゐの間を眠つてゐたものか、慎之助は自分でも、全くわからなかつた。

突然、何かの氣配ひを感じて、ハツとして眼を覺ますと、憎えたやうに、きよろ／＼と邊りを見まはした。

いつの間にか、空はホノ／＼と白んで、地上にも、かすかな光りのやうなものが流れてゐた。空には星の光りが消え去つて、磨ぎ澄ました鐵のやうな色に、冴え返つてゐた。

瞬間、慎之助は、それだけのことを見て取つたけれども、あたりには、べつに何の異状も見えなかつた。

(どうしたのだらう？ 何か、夢でも見たのかな？)

と、獨りでこゝろにつぶやくと、思はず首を傾げた時だつた。

突然、慎之助の頭の上から、眼の前にどさりと、まるで天からでも降つて來たやうに、一人の人間が落ちてくると、よろ／＼とよろめいたが、それでも倒れもせず、身輕に立ち直つた。

『あつ。』

と、慎之助が思はず、かすかな叫び聲を洩らした時には、相手の顔がひよいと振り返つて、かすかな光りの中に、慎之助の顔を見て取つたと思ふと、

『あつ。』

と、まるで悲鳴に近いやうな、かなしい、絶望的な聲が、その唇を破つて、邊りにひゞき渡

つた。

それは、咄嗟に見たところでは、三十近い、髯なぞ生やして、瘦せて背丈がひよろ／＼と高く、それでもボロ／＼の背廣を着てゐた。

その男が、慎之助の顔を見た時の驚きやうと言つたら！ まるで眼の玉が飛び出るのではないかと思はれるほど、大きく大きく眼を見張つて、打ちのめされでもした時のやうに、顔全體が傷ましく歪んだ。

そんなところに人間がゐるなどとは、まつたく思ひもかけずに、椎の木を登ると、太い枝を傳つて、高いコンクリートの塀を越し、往來に飛び降りたのである。——すると、恰もそこに待ち伏せでもしてゐたかのやうに、運わるく慎之助が、うづくまつてゐたではないか！ びつくりすると、恐怖に憎えたのも、無理はなかつた！

男はサツと顔色を變へ、世にも傷ましい、絶望に打ちひしがれた表情をしたが、それも一瞬間だつた。

次ぎの瞬間には、何事か決心したやうに、パツと眼も顔もかがやいたかと思ふと、何か小さなものを小脇にかゝへたまゝ、行きなり飛鳥の如く身を翻へすと、駆け出してゐた。

『待て！』

慎之助は、何が何んだかハッキリしたことはわからずに、ただ衝動的に嗚鳴ると、駆け出してゐた。

『泥坊々々！』

風を巻き起すやうにして、後を追っかけながら、夢事になつてさけびつゞけてゐた。

三

慎之助は、中學校時代には、ランニングの選手だつたし、柔道は二段の腕前だつた。いくら空腹で、自分ではヒョロ／＼してゐるやうで、物足りなくても、スポーツで鍛へた身體と、若さに満ちあふれてゐる元氣とは、べつだつた。

十メートルと走らないうちに、もう逃げ行く男の背後まで、迫つてゐた。手を延ばせば、襟首を掴むことも自由だつた。

『待て！』

耳の後ろでさげんで、手を延ばした時には、男は、さながら鷹に追はれた時の鬼のやうに、ハツとして首を縮めてゐた。

そして、もう敵はないと思つた刹那、

『免なさく。』

と泣き聲を絞ると、その場に身を辣めてしまつた。

それでも、小脇に抱へた、何か小さなものは、しつかりと両手で、胸の上に抱き緊めてゐた。

『怪しからん。』

慎之助は、ハッキリした根據もないのに、初めからてつきり泥坊だとばかり、信じ込んでゐた。

手向ひして來たら、二つ三つは打ん殴るつもりで、拳を握りしめて、振り上げてゐたが、相手が、あまりに意氣地がないので、張り合もなく、いつの間にかその拳を、降ろしてゐた。

『許して下さい。』

男は、小さなものを、しつかりと胸の上にかゝへて、顔を伏せ、丸くなつて地上にうづくまつたまま、哀れな泣き聲を出して、しきりに謝つた。

『いつしよに來たまへ。』

と言つて、ぐつと肩のあたりを掴むと、男はびつくりして、一尺ばかりも飛び上るやうにして、

『どこに行くんですか？』

と、聞いた。

『もちろん、警察に行くんだ。』

慎之助は、この邊では、どつちに行けば警察署があるのか、そんなことは分らなかつたし、一晩中、一回も警官が廻つて來なかつたところを見ると、交番も、近くにはないのだらうと思つた。

だが、泥坊を捕まへた以上、警察署に突き出すのが、當り前だと思つた。

『それだけは、どうぞ勘辨して下さい。この通りですから。』

と言つて、男は地べたに額を摺りつけるやうにして、何度も何度も「お辭儀をしたかと思ふと、今度は両手を合せて、慎之助を拜むのであつた。

『しかし、君は、どろぼうをしたんぢやないか。——警察署に行つて、罪の審判を受けるのが當然だ。』

『ですから、盗んで來たものは、そつくり返します。』

『僕に返してくれたつて、どうすることも出來ないよ。』

『返しますから、この場はこのまゝ、どうぞ見のがして下さい。』

『君は、また何んだつて、泥坊なんかするのだ？』
『すみません。』

と、鼻の頭を一つ引つこすると、べこ／＼頭を下げて、

『實は、女房のヤツが三年越の長患ひをして寝てゐる上に、小さな子供ばかり三人もゐるんで……それでも私が働いてゐる間は、どうにか斯うにか、やつてゐたのですが、去年の秋、失業してからといふものは、どうすることも出來なくなつてしまつたものですから……』

と、かなしさうな涙聲になつて、鼻をす／＼り上げた。

『それでは、君は、失業して困つてゐるといふのか？』

慎之助は、わが身の上につまされて、いくらか同情せずにはゐられなかつた。

『この二三日といふものは、女房に薬一服のませることも出來ず、子供たちにも、一日にたつた一度だけ、お粥を食べさせるのが、やつこのことで……このまゝでゐると、女房も子供も、餓ゑ死にするよりほかはないのです。それで、悪いことゝは知りながら、勝手を知つたこの家に、盗みに入つたのです。』

男は、ウソか本當か、わからないけれども、慎之助の同情心が、いくらかでも動いたと見て取ると、一層同情に慙へるやうに、哀れ氣に喋つた。

『ぢや、君は、この屋敷を、よく知つてゐるのか？』

『よく知つてゐるといふほどぢやありませんが、以前、建築事務所に勤めてゐました時、このお

屋敷が新築されましたので、度びく現場監督に來たことがあるのです。……それで家内の様子や、間取りの工合などを、よく知つてゐるのです。』

「一體、こゝは、どこだ？」

「上目黒です。』

「上目黒？」

「柳田伯爵家のお屋敷ですよ。有名な貴族院議員の。』

「さうか、華族さんか。』

「どうぞ、警察に突き出すことだけは、かんべんして下さい。私が警察に行つてしまへば、それこそ病氣の女房と、三人の小さな子供たちとは、餓ゑ死にをしなければなりません。』
と言つて、男はまた頻りに、ぺこぺこ謝つた。

人の性は善なり

しつかりと小脇にかゝへてゐたのは、寶石箱だつたし、そのほか、四百何十圓入つてゐる紙入れや、金鎖の附いてゐる大型の金時計、二三十圓ばかり小錢の入つたガマ口、銀製の文鎖など、

金に換算したら相當の額になるだらうと思はれるものを、みんな慎之助に渡した。

「私が盗んで來たのは、これだけです。これで皆なです。そつくりそのまゝ、あなたに渡しますから、これをお屋敷に返して下さい。そして、どうぞ警察沙汰などにはしないで、かんべんしてくれるやうに、あなたから、よく謝つて下さい。全く私の心が、一時迷つたのです。どんなに困つても、こんな恐ろしいことは、すべきはずではなかつたのです。今は、すつかり眼が覺めました。これも、あなたのお蔭です。何んとお禮を言つていいか、わかりません。若し、こゝであなたに捕まへられず、この盗みが成功したとすれば、それが病みつきになつて、これから先、私は本物の泥坊になつたかも知れません。危ふいところでした。全く、神さまのお助けです。これに懲りて、これからは、どんなに困つた場合でも、決して悪い考へは出しません。——それだけは誓ひますから、どうぞこの場だけは、見のがして下さい。』

と言ふのが、決してウソや偽りだとは思へなかつた。

誠心誠意が表に溢れて、大の男が涙ぐんですらゐるではないか！

慎之助としても、そんなにまで悔悟し、改悛を誓つて、許しを求めてゐるものを、その上、猶も警察に突き出すとは、言へなかつた。

今、この屋敷から盗んで來た品々や、金錢を、すつかり吐き出して、これを返して、表沙汰に

しないやうに謝つてくれと頼まれたのには、さすがの慎之助も困つたけれども、しかし、乗りかかつた舟で、それを断るわけにもいかなかつた。表沙汰にせず、内済にするには、どうしたつて慎之助が、その迷惑な役目を、引き受けるよりほかなかつた。

「好し、それでアトのことは、すつかり僕が引き受けたから、安心したまへ。——しかし、どう間違へても、今後は二度と再び、こんな悪い考へは起さないやうにするんですな。」

と、慎之助は大人つばい調子で、忠告した。

「よく、わかつてゐます。」

と言つて、男は頭を下げた。

「わるいことをすれば、きつと見附らすにはゐないよ。」

「ほんたうです。」

「奥さんや、小さな子供さんたちが、可哀さうぢやないか。」

「全くさうです。これからは、決してしませんから。」

「ぢや、もういいから、行きたまへ。——ほんたうなら、今こゝで、お金か何か、君に上げたいところだが、僕は、何んにも持つてゐないし、斯うしてこゝに、野宿をしてゐたくらゐの始末だから。」

慎之助が、きまりわるさうに言ふと、男は、ます／＼恐縮して、

「飛んでもない。そんなご心配までしていただいたのでは、申わけもありません。あなたには、この場で助けていたゞいたゞだけでも、このご恩を、いつになつたら返せるかもわかりませんのに……」

「こんなことくらゐは、當り前のことだと思ひます。——それを恩だなんて、大袈裟に言はれると、僕のはうで、かへつて恥しいくらゐです。」

「さうですか。それではせめて、僕の名だけでも、名乗つておきますから、この次ぎに、若し……」

と、言ひかけるのを、慎之助は抑へるやうにして、

「イヤ、名前なぞ、うかゞはなくなつて、いいですよ。——今度、若し再びお目にかゝるやうなことがあつたら、その時には、お互ひに、もうすこし、どうにかした境遇になつてゐたいものですな。」

と言つて慎之助は、はは／＼と、元氣よく笑ふと、男も釣り込まれたやうに、瘦せた顔に、ニツと微笑を浮べて、

「ほんたうですな。」

と、うなづいたが、

『では、これで失禮します。いろ／＼と、ありがたうございました。』
丁寧な禮の言葉を述べて、一つお辭儀をしたと思ふと、そのまゝ、すた／＼と行つてしまつた。

三四間も行つたところで、チラと振り返つたが、そこに立つたまゝ、じつと自分を見送つてゐる慎之助と、顔を見合せると、ニツコリ笑つて、そのまゝ足早やに行つてしまつた。

夜は、いつの間にか、すつかり明け放れてゐた。

慎之助は、ぼんやりそこに佇すんだまゝ、その男の後姿を見送つてゐたが、ほのかに流れてゐる朝霧の中に、男の姿は見えなくなつてゐた。

日の出前の東の空が走く、蒼く晴れ渡つた大空には、朝の白い雲が、軽々と浮んでゐた。

二

慎之助は、何んだか一場の夢を見たやうな気がしたが、しかし、青貝を螺鈿にした、黒塗りの小さな寶石箱や、つしりと紙幣の重みに膨らんでゐる、立派な鰐革の紙入や、金時計などを持つてゐるところを見ると、決して夢ではない。——今の不思議な出来事は、すべて現實に起つたことに違ひない。

(これだけのものがあれば、僕なんかの生活では、一年や一年半は、ちつとも困らなくてもいいのだ。)

と思つて、づしりと重い紙入や、すこし揺れても、カラ／＼と微妙な音が、かすかに聞える寶石箱の重さを、試すやうに揺すつて見たりした。——微妙なその音は、ダイヤモンドや、翡翠や、眞珠などの寶石が、かすかに觸れ合ふ音に違ひなく、うつとりするほど爽やかで、快く、

しかも氣高い音だつた。

睡眠は不足だし、空腹ではあるし、倒れさうに困憊し切つてゐる身にも、快いものは、やつぱり快かつた。

慎之助は、幾度か寶石箱を、しづかに揺すつては、その中で聞える、いかにもひそやかな、微妙な音に耳を傾けて、うつとりとなつた。

そのうちに、だん／＼日は高く上つて、牛乳屋の車が、がら／＼と通りすぎたと思ふと、ぼつぼつと人々の往來が初まつた。それは多くは労働者や、勤め人などが多かつたが、慎之助は、家があり、仕事があつて、決つた時間には、さうして辨當を持つて出かけて行く人々が、羨ましかつた。決つた家があり、仕事がある人といふものは、顔色からして違ふし、歩きぶりもちがふ。

——何んとなく自信があつて、しかも、元氣にあふれてゐる。

(あゝ、僕には、家もなければ、仕事もないのだ。)

と思ふと慎之助は、自分一人だけ社会から除け者になつたやうな気がして、かなしかつた。
(どんな仕事でもいいから、今日こそ探さなければならぬ。)

と、思つた。

それには、先づ第一に、預つてゐる品物を、返さなければならぬ。

三丁もつゞいてゐる高いコンクリートの塀を、ぐるりと廻つたところに、大きな、立派な門があつた。太い花崗石の門柱に、嚴めしい鐵の扉が閉つてゐたが、傍らの耳門を押して見ると、既に締りが外してあつたので、造作もなく開いた。

廣い／＼屋敷だつた。

門から玄關までは、凡そ二丁近くもあるだらうか。

両側には、椎だの、モチだの、モツコクなどの大きな木々が、手入れがよく行きとゞいて、美しく茂つてゐた。ツ、ジだの、アヲキだの、楓や、ドウダンなどの下草のたくひも、配置よくその梢や、葉を茂らせてゐるし、大きな捨石が、そこにも、こゝにもおいてあり、石の塔や、すばらしく高い石燈籠などが、木々の蔭から、床しい風情を以つて、隠見してゐた。

朝は、まだ早かつたが、それでも廣い日本館の兩戸は、すつかり開け放たれてゐたし、はるか

向ふに見える洋館の窓も、カーテンが引かれてゐた。

慎之助は、玄關に立つのも、何んとなく気が引けるので、勝手口のはうに廻つて行つたが、そこには四五人の召使が、忙しさに働いてゐた。

『今日は。』

と、慎之助が入口に立つと、一人の女中が、テラと振り返つたが、よく見もしないで、ご用聞きとでも、間違へたのだらう、すぐに向ふを向くと、

『今日は、何んにも入らないわ。』

と、言つた。

『ちよつと、用事があるのですが……誰かに會ひたいのですが。』

慎之助は、泥坊から預つてゐる品々が、貴重な品物ばかりなので、女中なんかには、渡されな
いと思つた。——ちやんと責任のある人に會つて渡さないで、若し、間違ひでもあつては、この
屋敷の人に申しわけないばかりではない。あの泥坊の男にも、すまないと思つた。

『えつ、あなたは、ご用聞きぢやなかつたの？』

と、さつきの女中が振り返つて、眼を見張るやうにした。

『僕は、お展敷の方に、どなたでもいいから……ちよつと、お目にかかりたいのですが。』

『まあ、あなたが手に持つてゐるのは、それ何なの？』

と、一人が言へば、物珍らしさうに立つた二三人の女中が、

『まあ、寶石箱だわ。』

と、もう一人が言つた。

『お嬢さまの寶石箱と、そつくりぢやないの。』

ほかの一人が言つて、呆れたやうに眼を見張つた。

『あなた、どうしてお嬢さまの寶石箱なんか、自分で持つてゐるの？』

『それ一體、どうしたのよ？』

『不思議だわね。——お嬢さまの寶石箱と、同じものを持つて來たりして……どうしたの？』

『一體、誰に會ひたいつ言ふの？ 會つて、どうするの？』

などと、女中たちは上り框のところに固まつて、べちやくちやと喋べり、好奇心に満ちた眼を見張つてゐた。

三

『まあ、こんな忙しい時に、皆な何をしてゐるのさ。』

そこへ女中頭らしい四十がらみの、でつぶり肥つて、小さな丸髷に結つた女が出て來ると、女

中たちが固まつて、べちやくちや喋べつてゐるのを見て、頭からガミ／＼と、叱りつけた。

『奥ぢや、皆さま、疾つくにお眼ざめになつてゐらつしやるんだよ。——お食堂が、七時だとい

ふのは、毎朝、決り切つてゐることぢやないの。』

女中頭らしい女は、慎之助のはうになど、てんから注意を向けようともしなかつた。たゞ、若

い召使たちが、この朝の忙しい時に、アブラを賣つてゐるのだと、思ひ込んでゐるらしく、

『早く、お支度をしてくれないと、わたしが、またお小言を頂かなくちやならないことになるんですよ。』

と、みんなをその場から、追つばらはうとした。

『でも、あの人が、ご用があると、おつしやるのですもの。』

『どなたにか、お屋敷の方に、お目にかゝりたいのですつて。』

『お嬢さまの寶石箱と、同じものを持つてゐらつしやるの。』

『ですから、このまゝ、追ひ歸すわけにも、いかないでせう。』

女中たちは、みんな口々に、辯解するのであつた。

『えつ。——一體、あなたは、誰なのよ？』

女中頭は、みんなから言はれて、その勝手口に突つ立つてゐる慎之助に、初めて氣が附い

た。

自分が、みんなを掻きわけるやうにして、前に出て、上り框に立つと、眉をひそめるやうにして、慎之助の姿を、頭の上から足の爪先まで、見上げ見下ろしてゐた。でも、べつに怪しいやうな人物だとも、思へなかつた。なるほど、何日も散髪などしないと見えて、髪の毛は蓬々と延びてゐるし、眼は窪んで、ぎろりと光つてゐる。着てゐるものも、垢じみたサーヂの詰襟で、ズボンの膝のあたりには穴があいてゐるし、上衣の袖口も破れてゐる。

一見したところは、バタヤカ、ルンペンのやうに汚ないが、顔立ちはとつてゐるし、よく見ると眼の光りも柔和に、鼻筋が秀でて、氣品がある。——ちやうど、貴公子が、何かの事情で、落ちぶれたのではないかと思はれた。

人のいい女中頭は、自分も一人の子供を、中學生の三年の時に失つた経験があるし、慎之助の姿を見ると、すぐに、一層深く同情してしまつた。

「何んだつて、こんなところに來たの？ どこから來たのさ？」

と聞いた聲でも、態度でも、さつきとはがらりと變つて、さながら我が息子にでも對するやうに、やさしかつた。

「僕は、實は、通りがかりの者なんです……」

と、言つた。

まさか、昨夜はこの屋敷の塀の外で、野宿をしたのですとは、初めからは言へなかつた。

「さう。通りがかりの人が……それで、どうしたの？」

「實は、お屋敷に入つた泥坊を、捕まへたんです。」

「えつ。」

と、女中頭は顔色を變へて、びつくりすると、

「このお屋敷に、泥坊が入つたんですつて？」

と言つて、息を呑んだ。

「では、まだ、何んにもお氣が附かれないのですか。」

と慎之助は、これだけの品物を盗まれてゐるのに、まだ氣が附かないなんて、なるほど大きな屋敷といふものは違つたものだ、一方で呆れもすれば、一方では感心せずにはゐられなかつた。

「それで、どこから、泥坊が入つたのでせう？」

と、女中頭は、すぐには信じかねるものゝやうに、首を傾げてゐた。

「さうですな。——どこから入つたのか、それは僕も知りませんが、椎の木を傳つた、塀から飛

び下りるところを、僕は捕まへたんです。』

『まあ。』

と、溜息を吐いて、

『それで、怪我はしなかつたの？』

と、聞いた。

『怪我なんかするものですか。——品物だけは、すっかり取返ししましたから、それをお返しした
しと思つて、こゝに持つて来たのです。』

『一體、どんなものを、取返してくれたといふの？』

『これだけです。』

と言つて慎之助は、泥坊から受取つた品々を、そこに並べて見せた。

『まあ——』

と、女中頭は仰天したが、いつの間にか召使たちは、七八人も、そのまはりを、ぐるりと取巻
してゐた。

『お嬢さまの寶石箱に、ご前さまのお時計や、紙入もあるわ。』

みんな不思議さうに、品物と、慎之助の顔とを、見比べてゐた。

誰が盗んだのか？

一

慎之助は、品物だけ返すと、さつさと歸らうとしたのであつたが、執事の控室のやうなところ
に上げられた。内玄関側の粗末な部屋だつた。

八畳の室である。窓の下に、古ぼけた机が一脚据えて、青い色の羅紗の布が、掛けてあつた。
座蒲團もなく、畳の上にぢかに坐らせられてゐるのであつたが、それでも慎之助は、畳の上に
坐るなどといふのは、何日ぶりのことだらう。——何か勿體ないやうな気がして、キョロ／＼
と、あたりを見まはしてゐた。

そこへ、頭の禿げた、下臉のふくれた、病弱さうな老人が一人、ゴホ／＼と咳をしながら、
入つて来た。

木下といふ家扶で、地の薄くなつたやうな紬の袴を、穿いてゐた。

『君が持つて来た品物は、たしかに、ご當家のものに相違ないが、君の言ふことは、どうも辻褄
が合はないやうに思ふのだが……本當のところを、言つてもらひたいものだな。』

木下家扶は、言ひにくいところを、ゴホ、ゴホと、空咳にまぎらしつゝ、ぼつり／＼と言つ

た。

『僕の言ふことが、辻褄が合はないと言つて……しかし、僕は、ウソにも本當にも、ありのままのことを、お話ししたのですけれども。』

慎之助としては、自分を疑つてゐるらしい木下家扶の言葉は、心外で堪らなかつた。ムツとするのを、努めて冷静に口を利いたのであるが、しかし、不満な氣色は、おのづからその表情にも、言葉の調子にも、現はれずにはゐなかつた。

『では、君は、君の言つてゐることが、飽くまで事實だと、頑張るのだな？』
と言つて木下は、老眼鏡越しに、じろりと慎之助の顔を見つめた。

『頑張るにも何も、まつたく事實ですから、仕方がありません。』

慎之助は、老人の疑ひぶかい言葉が、だん／＼うるさくなつて、打つちやるやうな調子で言つた。

『ふん。事實か。』

と、木下は人を小馬鹿にしたやうに言ふと、鼻の先で笑つたが、

『若し、君が言ふことが事實だとするなら、その捕まへた泥坊を、なぜ、警察署に、突き出さなかつたのか？』

と、言つた。

『突き出さうとしたんです。——しかし……』

と言ひかけて慎之助は、なぜか口籠つてしまつた。

『しかし、どうしたのかね？ アトをつゞけて見たまへ。』

木下は、慎之助が口籠つてしまつて、そのまゝ言ひつゞけられないのは、何か疚しいことがあるからに違ひないと察した。——すこし聲すら荒げるやうにして、性急に追求した。

が、慎之助は、べつに慌てもしなれば、顔色も變へなかつた。——飽くまで落着いて、冴えた涼しい眼ざしで、むしろ憐れむやうに、木下老人の顔を、しばらくの間、じつと見てゐたが、
『當人も、表沙汰にしないで、許してくれと頼みますし、氣の毒であつたから、盗んだ品物だけ返させて、そのまゝ、許してやつたんです。』

と、ありのままを、卒直に、しづかに言つた。

『なるほど。』

木下家扶は、考へ深さうに、うなづいたが、しかし、やつぱり、そのまゝ信じようとはしなかつた。

猶ほも疑ひぶかい眼ざしをして、じつと慎之助の顔を見つめてゐた。

慎之助は、猜疑心の深い、人を容易に信じようとしないその老人が、何となくムシが好かず、イヤで／＼たまらなかつた。——一刻も早く、こんな老人の傍から離れたいと思ひ、早く、この大きな星敷から、逃げ出してしまひたいと思つて、どん／＼焦つて來てゐた。

二

『足りない品物でも、あるのでせうか？』
と、慎之助は聞いた。

さうでもなければ、自分が、こんなに疑はれるはずはないと思つた。——して見れば、あの男が、何もかも自分に渡したやうなふりをして、その實、何かこつそり隠して、持つて逃げたのではあるまいか？

そんな疑ひが、ふと慎之助の頭を掠めて走つた。

『イヤ、品物は足りなくはないがね。——それに紙入の中の紙幣も、ガマロの中の金も、そつくりそのまま、ちつともなくなつてはゐない。』

それを聞いて慎之助は、安心した。——自分のために安心したのではない。あの男のために安心したのである。あんな場合にも、一文の金もゴマ化さうとはせず、みんな渡した正直さが、慎之助は嬉しかつた。ほんたうに後悔し、ほんたうに改心したのだと思つて、あの男のために、

祝福してやりたい氣持にすらなつた。

『それなら、あなたの方では、何んにも言ひ分はないはずぢやありませんか。』

『さう。——べつに言ひ分があるわけではないが……』

『とにかく、一旦盗まれたものが、そつくりそのまゝ返つて來たんだから、それでいいでせう。』

『それは、さうだが……』

『僕は、あれだけのものを、お返しすればそれでいいんです。——僕の用事は、これでもうすんだはずですから、歸ります。』

と言つて慎之助が、立ち上らうとするのを、木下老人は、あわて／＼引き留めた。

『待つて下さい。話は、まだ、すんでゐないのだ。』

と言つて、まるで慎之助が逃げようとするのを、抑へでもする時のやうに、右の手をしつかり掴んで、

『もう一度、こゝに落着いて下さい。——どうも臍に落ちないことがあるから、よく聞き糺して見なくてはならない。それでないと、わしの落度になつて、アトで、どんなに迷惑をするやうなことになることも、限らないから。』

と、無理やりに、そこに引き据ゑようとした。

『そんなになくても、大丈夫ですよ。そこを放して下さい。僕は、決して逃げも、隠れもするわけぢやないから、心配しなくともいいですよ。』

慎之助は、むしろ、この氣の小さい、正直な木下老人の立場が、氣の毒になつて、笑ひながら、元の席に落着いた。

『腑に落ちないといふのは、どんなことですか？』
と、聞いた。

『それがな……』

と、正面から聞かれると、かへつてオド／＼して口籠るのを、慎之助は一層憐れむやうに、

『どんなことを聞かれても、決して僕は氣にしませんから、どうぞ、何んでも聞いて下さい。』

と、ニヤ／＼笑ひながら言つたが、木下老人の眼から見ると、それが一層、大膽不敵な印象を與へたので、餘計氣味がわるく、恐ろしかつた。

三

『たとへば、捕まへた泥坊を、警察署には突き出さないとしても、とにかく一應は、このお屋敷に、いつしよに連れて来て、謝まらせるのが、ほんたうではないかな。——それを、泥坊は逃がしてしまつて、品物だけ返せば、それですむといふわけのものではないだらう。』

木下老人は、急に勇氣を取り返して、決めつけるやうに言つた。

『さう言はれれば、なるほど、さうに違ひありません。』

と、慎之助は素直に頷いた。

『僕も、さう思つたものですから、いつしよにお屋敷に伺つて、品物をお返して、謝つたはうが
いと、しきりに、すゝめて見たのですが。』

『品物を、お前さんに預けて、逃げてしまつたといふのだらう？』

『イヤ、逃げてしまつたのぢやない。僕が、アトのことは、引受けたのです。——品物をお返して、よく謝つてやるから、行つてもいいと、僕が、さう言つたのです。』

『では、ご當家で、飽くまで表沙汰にするとおつしやつた時には、君は、どうするつもりなんだ？』

『しかし、品物が返つた以上、内済にしてやつても、いいぢやありませんか。——盗んだ當人は、すつかり後悔して、改心したのですから。』

『さうも言へないことはないが……しかし、本當に君が、泥坊を捕まへたか、どうか、こちらでは、分らないことだし……』

『しかし、捕まへたのは、本當のことなんです。』

『それが、どうも腑に落ちかねることぢやて。』

『どうしてですか？』

『よく考へて見るがいい。君だつて、ずいぶん困つてゐるところらしいぢやないか。それが、あれだけの金や、貴重品が、泥坊を捕まへて手に入つたとすれば、それをわざ／＼屈けるやうな、馬鹿げたことをせずとも、自分で使ふのぢやなからうか。』

木下老人がさう言つて、ニヤリと笑ふと、正直一徹な慎之助は、くわつとして、火のやうな憤りを發した。

『あなたは、僕を、そんな不正直な人間だと、思つてゐるんですか！』

と、顔色を變へると、唇をブル／＼と慄はせた。

『盗んだ當人が、君ぢやないかと思つてゐるんだ。』

づばりと言はれて、慎之助は、

『えつ。』

と、開いた口が塞がらなかつた。

人を見る明

全身が、まるで軟らかな鳥の羽の中にでも埋まつたやうに、フカ／＼として心地のいゝベツト。

美津江は、さつきから何度、その柔らかなベッドの上で、寝返りをしたことだらう。起きなければならぬと思ひ、起きようと思ひながら、甘い、快い睡眠が、後から／＼と襲うて来て、どうしても思ひ切つて、起きられないのである。

さうかといつて、それ切り前後も知らぬやうに、一時間でも二時間でも、ぐつすり寝込んでしまへるわけではなかつた。——甘い眠りが、臉を引き附けるやうに重くし、心が遠く、かすかになつて行くと思ふと、すぐに憎えたやうに、ハツとして眼が覺めるのであつたが、どうしてもそのまゝ、思ひ切つて起きられない。

(もう七時かも知れないわ。)

と思ひ、七時には皆なが食堂に揃ふ習はしになつてゐることを思ふと、もうこの邊で思ひ切つて起きなければならぬのであるが、また、

(七時に食堂に集まるなんて、あんまり早すぎるわ。十時くらゐだと、どんなにいゝか知れないのに。——それに昨夜は、わたし、遅かつたんですもの。もう一二時間だけ、眠らせてほしい

わ。

と思つたりして、寝返りをすると、枕にしがみつくやうにして、眠るともなくウト／＼とした。

コツ、コツ。

物しづかなノックに、美津江は、てつきり誰かど起しに來たのだと思つて、とたんに眼がハッキリ覺めた。

『は。』

と返事をする間もなく、ドアが開いて、入つて來たのは、女中頭のお政だつたが、すこしあわてたやうに、美津江のベッドに近づいて來ると、

『お眼ざめでございますか。』

と、言つた。

『え。——今、起きるところだつたのよ。』

美津江は、ベッドに仰向いたまゝ、ニツコリした。

『お嬢さま。大へんでございますわ。』

女中頭は、顔色を變へてゐた。

『威かしちやイヤだわ。お父さま、怒つてゐらつしやるの？』

『いゝえ。お屋敷に、どろぼうが入りましたのです。』

『S.O.S』

『昨夜。』

『それで、何か、大事なものでも盗まれたの？』

美津江は、べつに驚きもしなかつた。自分の大事なものを盗まれたことは知りもせず、平氣で、何を盗まれたのかと聞いた。

『お嬢さまの寶石箱を、持つて行かれたのでございます。』

『えつ。』

さつと美津江の顔色が變つたと思つたら、ベッドの上に跳ね起きてゐた。四邊をくる／＼と見まはしながら、

『そんなはずつて、ないと思ふんだけれども……』

と、つぶやいたが、何んだか夢を見てゐるやうな氣がした。

(一體、寶石箱を、わたし昨夜は、どこに置いたのかしら。)

と、可愛い首をかしげるやうにして、改めて考へて見るのであつた。

昨夜は、お友達に誘はれて、父の許しを受けて、美津江は日比谷公會堂の音樂會に行つたのであつた。

音樂がすんで、すぐに歸つて來れば、十時には歸れたはずだつたが、銀座に出て、お茶を飲んだりしたので、送られて屋敷に歸つて來たのは、十二時をすこし過ぎてゐた。生温かい風が吹いて、濕氣をふくんだ重い空氣が、肌にとくとくするやうな夜だつたので、ベッドに入る前に風呂に入つたりしたので、すつかり遅くなつてしまつた。枕もとのスタンドの紐を引く時に、チラと置時計の針を見たが、一時十五六分を過ぎてゐたことを、ハッキリ思ひ出した。

(まあ！ やうやく五時間くらゐしか、眠つてはゐないんだわ。)

と、美津江は改めて思つたが、しかし、それにしては、不思議に今朝は、頭が冴えてゐるやうな氣がした。——さつきまでの眠い、ぼやけたやうな氣分は、どこかに吹つ飛んでしまつて、氣持がハッキリしてゐた。

屋敷に歸つて來た時には、思つたよりも遅かつたのと、夜がどんなに遅くなつても、とにかく朝は、七時には食堂に揃はなければならぬ習はしになつてゐると、それから、汗ばんだ肌を、すこしも早くお湯に入つて、さつぱりしたいのと、かなり焦つてゐたことを覺えてゐる。

錠の下りる戸棚から、寶石箱を出して、指環や、眞珠のネックレスや、腕環などをはづして、寶石箱の中に入れたことだけは、ハッキリ覺えてゐるけれども、さて、それからのことがわからない。寶石箱に鍵をかけたか、どうかもわからないし、寶石箱そのものを、戸棚の中に納めたか、どうかも覺えてゐない。

きちんと後片付けをするやうに、いつもの習慣にはなつてゐるのだが、それを昨夜に限つて、着換へ室のテーブルの上に置き放しにして、急いでイブニング・ドレスを脱ぐと、ガウンを引つけて、風呂場に降りて行つたやうに思ふのだが、それもどうかかわからない。

とにかく、あの寶石箱の中には、大事な貴金屬や、寶石の類ひは勿論のこと、美津江に取つては、錢金には換へがたい、貴重な品々が入れてあるのである。

それを盗まれて、持つて行かれたとあつては！

美津江が、顔色を變へたのも、無理はなかつた。

『大へんだわ。あれがなくなつたら、わたし困るわ。』

美津江は、ベッドの端に腰かけると、素足でスリッパを探りながら、半ば泣き聲を出して、『早く、警察に届けて、何とかして取返してよ。』

と、それを今こゝで、いくらお政に言つたところで、どうにもならないことは分つてゐなが

ら、懇へすにはゐられなかつた。

『お嬢さま。どうぞ、お落着きあそばして……』

と、お政もいつしよになつて、うるたへながら、

『盗まれたことは盗まれたのですけれども、それを取返して、わざわざ届けてくれた人があるのです。』

と、説明して聞かせた。

『あらー』

美津江の顔は、急に晴れくゝとなると、美しい双眸を、安堵と、悦びとに、キラ／＼とかどやかして、

『ぢや、盗まれなかつたと、同じことぢやないの。』

と、言つた。

『はゞ。』

『それなら、そのことを先に言つてくれれば、あんなにびつくりしなくても、すんだのに。イヤだわ。』

『ところが、お嬢さま。それを泥坊から取返して、深切に、わざわざ届けてくれた人を、木下さ

泥坊の狂言だと言つて、疑つてゐるんでございますの。』

『まあ。』

『何んですか、表沙汰にするとか、しないとか言つて、今、取調べてゐるところですわ。』

『そんなことつて、ひどいわ。——木下も、ものがわからないのね。』

と、美津江は眉をひそめた。

三

木下老人は、律氣で、飽くまで正直一徹な人物だつたけれども、それだけ頑固で、物わりのわるいところもあつた。——何しろ美津江の父が、まだ子供だつた時分から、今日まで四十年に餘る長い間を、何一つの間違ひもなく、コツ／＼と家扶の職を奉じて來た人間である。今の時代になつても、伯爵の〇とを殿様と思ひ、美津江のことは、姫君だと信じてゐるのだから、それだけでも木下家扶の人物が、凡そどんな風かといふことは、よく分るはずだつた。

『つまり、君が、一人二役の狂言をしてゐるんぢやないかと、斯う思ふんだよ。』

と、木下老人は落着いて言ふと、熱して赤い顔になつて、額からは湯氣を立てんばかりの憤之助の顔を老眼鏡越しに、じろりと見た。

『一人二役の狂言つて、一體、それはどんなことですか？』

慎之助は、燃え立つ憤りを抑へて、努めて冷静に聞いた。

『自分がどろぼうに入つて、品物を取返したやうな面つきをして、つまり、その盗んだ品物を返して来るのだな。』

『だが、何んのために、そんな馬鹿々々しいことをするんです。』

『それか？ それは何んだらうな。つまりそのお禮を貰ふためだらうな。』

『しかし、そんなことをして、お禮を貰ふよりも、盗んだ金を使へば、面倒がなくていいぢやありませんか。』

『人間には、良心といふものが、あるのだからな。』

と、木下老人は落着いた態度で、刻み煙草を一服吸ふと、尤もらしく言つた。

『良心があれば、どろぼうなんかしないはずでせう。』

『そこでです。』

木下老人は、さう言つて一人で感心したやうに頷いたが、

『盗んだ金を使へば、良心が咎める。また、それが見附けられると、この手が、斯ういふ工合に、後ろにまはらなければならぬことになる。』

と、自分でわき、二本の手を後に廻して見せて、

『しかし、一度盗んだものでも、それを元に返して、お禮に貰つた金なら、いくら使つても良心が傷まない。——つまり、お禮に貰つた金だからな。それから、お禮に貰つた金なら、いくら使つても、手が後に廻るやうな心配はないです。』

と、木下老人の言葉には、次第にお國訛りがまじつて来た。

『なるほど。——そこまで複雑に考へてゐるのですか。』

慎之助は、腹を立てるよりも、むしろ感心したやうにうなづいたが、同時に人間といふものが浅猿しく、この世の中が、寂しくなつて来た。

愛する女性に裏切られ、親友といふやうな人々にも、揃ひも揃つて冷淡な待遇を受けてから、慎之助は短い間ではあるけれども、この人生といふものについて、人間といふものについて、實にいろ／＼な多くのことを學んだ。

父が亡くなつてから、伯父に引取られて、そこでずぶん苦勞もし、辛抱もしたけれども、しかし慎之助には一方に、楽しい夢があつた。

それは戀である。青年の理想と野心とである。——お互ひに純な氣持で、愛し合つてゐるといふこと、どんな苦勞も、艱難も、二人が手に手を取つて、慰め合ひ、勵まし合つて行きさへすれば、何んでもないと思つてゐた。

また、伯父の家庭で、どんなに虐待され、苦しんでも、自分は、これだけで終る人間ではないのだと思へば、その自信と、希望とに依つて現在の苦勞など、何んでもなかつたのである。(東京に出れば！)

さう思ふと前途の生活は、實に洋々たるものに考へられて、心は勇氣と希望とに、燃え立つのであつた。

だが、その戀は、どうであつたらうか？ 東京に出て來た結果は、どうであつたらうか？ 戀人に裏切られ、徒らに人を頼みとすることに失望したばかりではないか！ やうやく、この人生に於いて、ヨチ／＼と立ち上らうとしてゐるところを、棍棒を以て腦天を、めちやくちやに叩きつけられたのも、同じことだつた。

今、また慎之助は、正直で、純で、清らかな心から、わざ／＼泥坊から取返した品物や、金銀を、そつくり返さうとして届けて來れば、思ひもかけず無實の罪で、疑はれなければならないとは！

世の中には、神も、佛もないやうな氣がして、寂しかつた。

口惜しいといふよりは情けなく、つい臉から涙があふれて、ホロリと一滴、坐つてゐるわが膝の上にこぼれた。

四

『ほう。』

と、木下家扶は、眼鏡越しにじろりと見て唸つた。

『君は、泣いてゐるな。』

『僕が、泣いてゐれば、どうしたんです？ 罪もないのに疑はれれば誰だつて口惜しくて、泣きもしますよ。』

慎之助は、沁み／＼とした悲哀を、身に沁みて感じながら、突つかかるやうな調子で言つた。

『口惜し涙か。』

『あなたは、僕を、からかつてゐるんですか？』

『べつに、からかふわけでもないです。とにかく、こゝは穩やかに、引取つてもらふことにしませう。——君だつて、前途のある人間だからな。愁ひ表沙汰などにして騒がれたら、後の出世のためにだつて、よくないだらう。』

『……………』

慎之助は、諄々として説く木下老人の言葉を、何を言ふのかといふやうに、無言で聞いているた。

『君だつて、涙を流すくらゐだから、自分のわるかつたことは、疾づくに後悔してゐるのだらう。』

『……………』

『わしは、べつにキリスト教ではないが、悔い改めさへすれば、神さまも許して下さるといふではないか。』

『……………』

『君が、涙まで流して改悔してゐるものを、わしは、その上、君の罪を責めようとは思はない。』

『……………』

『ご前さまのはうへも、わしから好しなに取計つておいて上げよう。また、君が改悔さへすれば、それに品物や金銭が、そつくり返つて来た以上、こちらとしては、何も表沙汰にする必要もないのだ。』

『……………』

『見たところ君も、根からの悪人でもなさうぢやないか。』

『……………』

『困り抜いた揚句、一時の迷ひから、大それた泥坊などをやるやうなことにもなつたのだらう

が、二度と、こんな恐ろしいことを繰返してはならない。』

『……………』

『さういふわけで、お禮を上げるどころではないからな。表沙汰にされないのを、せめてもの仕合せだと諦めて、こゝは素直に歸るのだな。』

律氣で、正直で、氣の小さい木下老人は、その場を穩やかに納めようとして、宥めるやうに言つた。

『一體、誰が、お禮をほしいなど言つたのですか？』

それまで、何んと言はれても、黙つてゐた慎之助は、初めて穩やかに、でも、きつとなつて反問した。

『えつ、それは……………』

と言つたなり、木下老人は眼を白黒させて、すぐには、後の言葉がつゞかなかつたが、

『それは……………誰も、そんなことは言はないけれども。』

と、やうやく言つた。

『お禮など貰ふなんて、僕は、夢にもそんなことは、考へてはゐなかつたのです。たゞ、誰か責任のある人の手に、渡せばそれでいいと思つてゐたのです。若し、今、お禮を下さるといつて

も、そんなものは貰ひません。貰ふはずありませんし、そんなものを貰ふことは、僕の良心と潔癖とがゆるさないので。』

『えつ。』

『僕が泣いてゐるこの涙は、決して後悔や、改悛の涙ではないのです。自分といふものが、信じてもらへない口惜し涙なのです。——人を信ずることの出来ない人間といふものに對する淺猿しさ、絶望と、憤りの涙なのです。』

『えつ。』

『表沙汰になつたつて、僕は、決して恐れませんが、恐れる必要がないのです。しかし、僕は初めから、お禮を貰ふなどといふことは、夢にも思つてゐなかつたことですし、品物や金銭を、たしかにお返しすれば、それで僕の役目はすんだのですから、このまゝ歸ります。』

『……………』

『本當は、表沙汰にでも何んにでもして、僕が果して、あなた方の疑つてゐるやうな人間か、どうか、明らかにしたいところですが、それでは、僕が捕まへた泥坊との信義に背くことになるし、折角、改心したものを、再び悪の泥沼の中に、追ひ込むやうな結果にならないとも限りませんから、僕は、疑はれたまゝ、これで歸ります。いつかは僕の潔白も、ハッキリあなた方にも、

わかる時が来るでせうから。』

と言ふと慎之助は、呆氣に取られたやうに、物も言へずに、眼ばかりパチ／＼させてゐる木下老人をそこに残して、さつさと出て行つた。

『馬鹿ねえ、木下は。——お前には、人を見る明といふものがないのかしら。その年になつて。』
白孔雀のやうに誇り高く、美しい令嬢の美津江が、いつの間にか、その部屋に入つて來たと思つたら、木下老人を見下ろして、窘めてゐた。

『へつ。』

木下老人は、思ひがけなくその場に、美津江の姿を仰ぐと、ハツとしたやうに、疊の上に兩手を突いて、白髪まじりの禿げ頭を下げた。

卒 倒

どこに行く當てもなかつたし、こゝから出て、どつちを向いて行つたらいいのか、わからなかつた。

たゞ、お腹が空いてゐるのには、閉口した。興奮してゐたせぬか、怒つてゐたせぬか、家扶の

老人と向ひ合つてゐる間は、左程にも思はなかつたのに、イザ破れ靴を穿いて、一步外に出たとたん、堪へがたい空腹が、一時におそひかゝつて来るやうに、はげしく感じられた。

二三歩あるいたところで、よろ／＼とよろめくと、思はずそのヒマラヤ杉の下枝に掴まつて、やうやく身を支へたが、もう一步もすまないやうな気がした。眼までクラ／＼として、危ふくそこに昏倒しさうになるのを、

(くそツ。)

と、齒を食ひしぼるやうにして、やうやく二三歩あるいたが、また、前にのめりさうになるのを、

(こんなところで、倒れてなるものか！ これくらゐのこと！)

と、自ら勵ました。

倒れるなら、せめて一步でも二歩でも、この屋敷を離れてからだと思つた。——こんな屋敷の中で倒れたら、何もかも見透かされて、

(それ見ろ。)

と、言はれなければならぬだらう。失業と、餓ゑのために、どろぼうに入つたり、それこそ一人二役の狂言をやることになつたのだなどと、頭から決めてしまはれなければならぬだらう。

う。

さう思ふと、負けん氣の慎之助は、こゝで倒れるなんて、口惜しかつた。——どんなことをしても、倒れてはならないぞと、我れと我が身に固く言ひ聞かせるやうにして、唇を噛んだ。

一歩行き、二歩行き——門までの間が、ナカ／＼長かつた。

慎之助が、自から勵ましたながら、門の手前まで、やうやく歩いて行つた時、誰かが後から小走りに近づいて来る足音が聞えたと思つたら、

『もし／＼。』と、呼びかけた。

でも、慎之助は、それが、まさか自分を呼びとめてゐるのだとは、全く氣が附かなかつた。

『……………』

従つて返事もしなければ、振り返らうともせず、早く、門の外に出てしまひたいと、焦つてゐた。

『もし。』

と言ふと、慎之助の後から追ひ附いて来て、顔をのぞいたのは、割りに優しいと思つた、女中頭だつた。

『僕ですか。』

と、慎之助が立ちどまると、女中頭のお政は、

『すみませんが、もう一度、ちよつと引つ返して下さいませんか。』

と、言った。

『何んの用です？』

と、慎之助は、お政には、べつに怒つてゐるわけではないけれども、木下家扶から疑はれた餘憤が、まだ癒えないところなので、ムツとして言った。

『あの……お嬢さまが、お話したいことが、おありになるさうでございますから……』

と、お政の言葉が、まだ終りもしないうちに、

『ご免です。』

と、慎之助は佛然と色を變へて、はげしい權幕で斷つた。

『でも……』

と、お政が一生懸命に言はうとするのを、慎之助は、くわつとなつて、

『まだ、この上に、もう一度僕を引つ返させて、僕をおもちやにし、僕を侮辱しようとするのですか。』

言つたかと思ふと、捕へようとするお政の手を振り拂ふやうにして、門のはうに駆け出した。

『お待ちなさい。』

お政が、あわてゝ叫んだ時には、三四歩走つたと思ふ間もなく慎之助は、その石ころにでも踏いたのか、ばつたり前のめりに倒れてしまつた。

『あれ、危い！』

お政は、われにもなく實感をこめて叫んだと思ふと、すぐに飛んで行つて、慎之助を助け起してゐた。

二

『どこにも、怪我はしなかつた？ 行きなり駆け出したりして、ほんたうに危いぢやないの。』

母親が、わが子でも筋はり、窘めるやうな、實のこもつた優しい調子で言ひながら、サージの詰襟服の胸のあたりや、腰のあたりの塵埃を、拂つてゐた。

『……………』

慎之助は、母が亡くなつてから、こんなにやさしくされたことがないので、つい涙ぐんでゐた。

それでも、木下老人に疑はれた侮辱を思ふと、腸が煮えくり返るやうな氣がするので、黙つてゐた。

「人が呼びとめてゐるのに、向ふ見ずに駆け出したりするものだから、こんなことになるぢやな
50。」

「……………」

「さあ、溫和しくわたしといつしよに、引つ返しなさい。」

「僕は、イヤです。」

「なぜ？」

「僕を疑つたりして……引つ返して、また、あんな眼に逢はされるのは、僕は、ご免です。」

「だつて、あんなことは、木下さんだけのことで、ほかの方々の知つたことぢやないぢやありませんか。」

「しかし、僕は、もう人を信じませんから……」

「何を言つてゐるんです？ この人は。そんな僻んだことばかり言ふものぢやありません。」

「……………」

やさしく言はれて、慎之助が言葉もなく俯垂れてゐるところへ、突然、華やかな美津江の姿が
駆け寄つて来て、

「どうしたの？」

と、言つた。

「いえ。木下さんが疑つたものだから、この人、怒つてゐるんです。この人、怒つてゐるんです。と、お政はやさしい微笑をふくみながら、説明した。

「さう。無理ないわ。」

美しい瞳が、さも同感したやうにうなづいたが、

「ご免なさいね。——あなたの憤慨なされるのもだわ。気が利かない老人たら、ありやしないわ。だから今もさう言つて、叱つて來たの。」

その調子が朗らかで、とても感じが好かつた。

慎之助は、今まで胸の底に、いつばい痞へてゐた大きな氷の塊りが、暖かな日光の下に、見
る／＼融けて、消えて行くやうな気がした。

「いえ。べつに老人に、わる気があるわけではないといふことは、僕にもわかつてゐるので
が。」

慎之助は感激して、朴訥な調子で、吃り／＼言つた。

「それは、わる気なんて、みぢんもないのよ。——とつても正直で、律氣な老人なんですもの。」
美津江は、さながら十年の友にでも相對してゐるやうな、やさしい、親しみ深い微笑を見せ

て、

『でも、あなたのやうな正直な人を疑ふなんて、ほんとにイケないことだわ。その點は、わたしから謝るわ。』

と、拘泥りのない、さつぱりした調子で、かるく頭を下げた。

『すみません。あなたから謝つてもらつたりしては。』

と、慎之助は涙ぐんでゐた。

『ゆるして下さい。』

『もう、いいんです。』

『ぢや、ちよつとでもいいから、もう一度引つ返してね。』

『イヤ、僕は、こゝで、お別れしたはうが、いいと思ひます。』

『なぜ？』

『また、引つ返したりするのは、いかにも物欲しさうですから……さつきの老人に、笑はれます。』

『あなたは、そんなことを、氣にしてゐらつしやるの？』

美津江は、黒々と冴えた、美しい眼を見張つた。

『あなたは、僕を、信じてゐてくださるのでせう。』
『ええ。』

と、美津江は強くなづいたが、何んとなくオド／＼してゐるやうな慎之助の顔を、まともに見て、

『わたし、初めからあなたを、信じてゐるわよ。』
と、言つた。

『それでいいんです。——僕は、それで嬉しいんです。』

慎之助は感激して、かすかに聲が慄へて、うすく臉の中が涙ぐんでくるのを、そつと伏せた。

『あなたは、とても正直な人だと思ふわ。そのことは、わたし初め一見した時に、すぐにわかつたの。』

美津江は、長い間の親しい友達のやうに、打ち解けて、信頼に満ちた調子で言つた。

『感謝します！ 信じていたゞけば、それでいいんです。——では、僕は、これで失禮します。』
と言つて、慎之助はそのまゝ、とつと歩き出した。

『まあ。』

と、美津江は呆れると、

『待つてよ。』

と言ふなり、急いで後を追つかけたが、まだ、ものゝ五歩と歩かないうちに、前を行く慎之助は、さながら朽木でも倒れるやうに、ぱつたり倒れた。

三

『まあ。』

美津江は、さつと顔色を變へると、急いで駆け寄つたが、

『どうしたの？』

と、びつくりして、両手で慎之助の身體を抱へると、起きうとしたけれども、美津江一人の力には及ばなかつた。

『いいんです……いいんです。大丈夫ですから。』

と言ひながら慎之助は、自分でも起き上らうとして、一生懸命に身を藻掻いたが、不思議なことに、全身からすべての力が抜けてしまつたやうに、とても起きあがるどころではなかつた。

たゞ、手足を、じたばたさせるだけだつた。

そのうち、背筋や、腋の下などに、冷たい汗がにじんで來たと思つたら、胸がくるしくなつて、氣がかすかに、だん／＼遠くなつてしまつた。

『政や。どうしたんでせう？ この人は。氣絶したわ。』

美津江は、それでもしつかりと、慎之助の身體を抱へたまゝ、びつくりして、更に顔色を變へた。

駆け寄つて來たお政にも、まさか慎之助が、極度の空腹と疲労とから、卒倒したのだと、氣が附くはずはなかつた。——見ると土のやうに血の氣を失つて、唇の色など、まるで死人のやうな色に變つてゐるし、口を利く氣力もない。

そればかりではなく、臉を固く閉ぢて、廣い額には、いつばい玉のやうな汗が、吹き出している。

生きてゐるといふことは、わづかに呼吸を通してゐることが、兩方の肩と、胸とが、ほのかに動いてゐるので、やうやくわかるけれども、若し、不意に見たら、死んでゐると同じことである。

美津江は、その死骸のやうになつてゐる慎之助の身體を、自分の膝の上に上半身を載せるやうにして、しつかりと抱きかゝへてゐた。

『お政、どうしたらいいの？ この人は、死ぬんぢやないの？』

美津江は、自分も眞蒼な顔色になつて、おろ／＼して言つたが、お政にも、どうしたらいいか

わからなかつた。

『早く、お医者さんを呼ぶよりほかありませんわ。』

と言ひながら、たゞ、ウロ／＼するばかりだつた。

『では、早く、誰か呼んでよ。内の人を呼んでよ。』

そこで、召使や、書生や、大勢呼んで、くつたりと死骸のやうになつてゐる慎之助の身體を、内に運び入れると、大急ぎで醫者を呼んだ。

極度の空腹のための卒倒だといふことは、すぐにわかつた。

家庭教師

長い間の無理な生活が、祟つたのに違ひなかつた。

スープを啜らされたり、鶏卵の半熟を食べさせてもらつたりして、間もなく氣力を回復するとはしたけれども、すぐにその後で、發熱した。

全身が打ちのめされた後のやうに、身體の節々が鈍く痛んだし、手も足も、抜けてしまふのではないかと思はれるほど、怠るかつた。

慎之助は、生れてからまだ一度も、見たこともないやうな、立派な部屋だつた。その隅に据ゑてある立派な、大きな寢臺の上に、寝かされてゐるのであつた。——こんなことをしてはゐられないと思ひ、起き上らなければならぬと思ひながら、全身に千鈞の重しでも附けられてゐるやうに、起き上れないのである。

起き上らうとして、身を藻掻くのであるが、一尺とは身體が持ち上らないで、そのまゝ、寢返りになつてしまふ。

『そつとしてゐらつしやらないと、イケないのよ。』

その度びに、美津江は傍に寄つて來ると、やさしく介抱してくれて、そつとさゝやくのであつた。

『大へん疲勞してゐらつしやるんですつて。——だから、當分は安靜にして、養生なさらないと、イケないんですつて。先生が、さうおつしやつたのよ。』

美津江は、ベッドの傍の肘椅子に凭つて、熱心に紹刺をしてゐる。時々お政が、藥や、營養物を持つて、入つて來ると、二人で力を合せて、それを慎之助の口に入れてくれるのである。

『すみません。』

慎之助は、かすかに言ふと、臉から涙があふれた。

『何を言ふのよ。すむも。すまないもないわ。——當り前のことぢやありませんか。』

美津江は、姉のやうにニツコリして、やさしく言ふ。

『何をするにも、身體が第一だわ。——十分養生して。早く、快くならないとイケないわ。』

『はあ。』

『でも、焦ることはないのよ。——いつまで、こゝで養生してゐらしたつて、ちよつとも構はな
いことよ。わたし、一生懸命になつて、介抱してあげるわ。』

『すみません。』

『あら、また、そんなことを言ふのね。すみませんだなんて。——そんなことに、氣を使ふもの
ぢやないわ。』

『……………』

飽くまでやさしく言はれて、愼之助は、もう何んにも言へなかつた。——もう一言でも、何か

言ふと、そのまゝわつと聲を上げて、泣いてしまひさうな氣がして、口が利けないのである。

たゞ、仰向きに寝てゐる双の眼から、いくら止めようとしても、涙がとめ度もなく、後から後
からと流れるのを、どうすることも出来なかつた。

『可哀さうに……どんなに苦勞をしたことか。』

お政はさう言つて、自分も涙ぐんで、はなを嚙りながら、そつとハンカチーフで、愼之助の臉
を拭つてくれた。

『でも、泣いて氣持が晴れるなら、いくらでも泣いたはうがいいわ。親があるか、ないか知らな
いけれども、母親の傍にでも、歸つて来たつもりでね。』

そんなやさしい言葉を聞くと、愼之助は、餘計、泣かすにはゐられなかつた。

二

それでも愼之助は、三日間といふもの、寝てゐなければならなかつた。——四日目には、氣分
もさつぱりしたし、かなり元氣も回復してゐた。

起きるといふし、まだ、起きてはイケないといふし、愼之助と美津江とが、争つてゐるところ
へ、年を取つた醫者が、往診してくれた。

『さうですな。この分では、もう大丈夫ですが……しかし、念のために今日一日だけ安靜にして
ゐたはうが、いいだらうと思ひます。』

醫者は、二人に對して、どちらにも差し障りのないやうなことを言ひおくと、歸つて行つた。

『それごらんさい、やつぱり、もう一日、寝てゐなければイケないつて、さう言つたでせう。』
と、美津江は醫者が歸つて行くと、勝ち誇つたやうに言つた。

『しかし、念のためにつて、言つてゐたぢやありませんか。』

慎之助は、ベッドの上に起きてゐたが、負けずに言ひ返した。

『どつちにしても、大事にするのに越したことはないわ。』

と、美津江は急に、大人っぽい調子で言ふと、

『でも、あなたは、どうしてそんなに、早く起きたいの？』

と、聞いた。

『……………』

眞面目に美津江から聞かれると、なぜか慎之助は、力なく顔を伏せて、つい黙つてしまつた。自分だつて、こんなに贅澤をして、養生させてもらつてゐれば、こんな仕合なことはないのである。

だが、前途のことを思ふと慎之助は、一日だつてこんなことをして、ぐづ／＼してはゐられないのである。——どうするといふ當てはないが、當てがないだけに、こんなことをしてゐるのを、餘計、焦らすにはゐられなかつた。

『ね、早く起きて、それからどうするのよ？』

美津江は、慎之助の切ない胸のうちも知らずに、猶も聞いた。

『べつて、どうするといふ當てもありませんが。』

慎之助は恥かしさうに、力なく答へると、つい溜息を吐いた。

『あなたは、失業者でせう？』

『えつ。』

『こゝを出て行つたつて、歸る家もないんぢやないの。』

『……………』

『それなのに、どうしてそんなに、早く出て行きたがるのよ？ 行きどころもないぢやないの。』
つばりと言つても、それは、ちつとも悪意には聞えなかつた。——むしろ美津江の心の温かさ
と、同情とが感じられるので、慎之助は、ほの／＼と心が濡れてゆくやうな氣がした。

『僕に、行きどころがないなんて……どうしてそんなことが、あなたに分つたんですか？』

と、慎之助は眼を圓くした。

『それくらゐのこと、ちやんと、知つてゐるわよ。』

と言つて美津江は、あど氣なく笑つてゐた。

『……………』

慎之助は、何も言へずに、きまりわるさうに眼を伏せた。

「だつて、そんなことくらゐ、ちつとも恥かしかることはないわ。」
美津江は、明るい顔をして言つて、笑つてゐた。

「僕は、べつに恥しいなどとは思つてゐませんが。」

「ちや、困つてゐるの？」

「困つてはゐます。——しかし、職業もなし、行きどころもないからといつて、僕は、いつまでもこゝで、厄介になつてゐようとは思ひません。」

「よくわかつてゐるわよ。それくらゐのことは。」

美津江は、今までに見せたことのないやうな、親身な調子で、しみじみと言つた。

「僕は、早く、こゝを出て、仕事を探したいのです。」

「あなたは、大學にもいらしたことがあるのでせう？」

「慶應の一年までです。」

と言つて慎之助は、聊かきまりわるさうに、顔を赧くした。

「ちやうどいいわ。では、こゝの家で働いてよ。」

「えつ。」

「あなたに働いてもらひたいと思ふ仕事があるのよ。」

「しかし……」

と、慎之助がためらふのを、美津江は押しかぶせるやうに、

「しかし……も、何もないぢやないの。あなたは、仕事を探してゐらつしやるのだし、こゝには仕事があるのだから、こゝで働くことに決めていたよければ、ちやうどいいのよ。」

と、強く、快活に、よろこびを顔に現はして言つた。

「ですが、どんな仕事でせう？ 僕に出来る仕事でせうか？」

慎之助は、いくらか不安さうだつた。

「ええ。大丈夫よ。——弟の家庭教師ですから。ね、どうぞ、弟の勉強を見てやつてね。」

慎之助は、柳田家の家庭教師となつて、働くことに依つて、偶然にも、青木先生——あの晝の先生に、めぐり逢ふやうな結果にならうとは、その時には、夢にも知らなかつた。

貴族の家

慎之助が、風通しのいい二階の部屋で、自分の勉強をしてゐると。

『宮内さん。』

と呼ぶ聲が、庭のはうから聞えて来た。今朝まで、寝てゐたはずの欣一が、もう起きたのかと思つて、

『どうしたの？ 欣一君。』

と言ひながら、急いで縁側に出て見ると、やつぱり欣一が、開襟のシャツを着て、半ズボンを穿いて、庭下駄を突っかけて、カン／＼日の當る庭に立つて、眩しさに二階を仰いでゐた。

『もう起きてもいいの？ 日が當つてゐるのに、帽子もかぶらないで……日射病になると、わるすよ。』

と、慎之助は注意した。

『もう、いいの。——これから、葉山に行くの。』

欣一は、今朝まで寝てゐた病人とは思はれないほど、元氣がいいし、ニコ／＼して、うれしさうである。

『さう。——欣一君も、もう葉山に行つてもいいの？』

『いいんだつて。先生も來診して、さうおつしやつたし、葉山のお姉さまにも、電話をかけたよ。』

『君が？』

『うん。』

と、欣一は頭を掉つて、

『トシやに、かけてもらつたの。さうしたらお姉さまも、先生がさうおつしやるのなら、すぐ來てもいいつて。』

と、言つた。

『さう。』

慎之助は、かるくうなづいたが、欣一も葉山の別荘に行つてしまへば、屋敷は空つぽになつて、いよ／＼寂しくなるな、と思つた。

伯爵夫妻は、七月に入つて、しばらく経つと、例年の如く七八人の召使を連れて、さつさと輕井澤の別荘に行つてしまつた、下旬になると、令嬢の美津江は、女中頭のお政と、もう一人の召使を連れて、葉山の別荘に行つた。

本當なら欣一も、美津江といつしよに行くはずのところを、生憎、お腹をわるくしてゐたので、海に行くのは暫らく見合わせるやうにと、主治醫から留められ、一週間ばかり、安靜に寢床に就いてゐた。——その間、もちろん、慎之助が教へる勉強も、休んでゐたのである。

欣一は、今年十三歳で、美津江とは腹違ひの弟である。——といふのは、美津江の母は、彼女を産んでからずと、産後の日経ちがわるくて、寢床に就き切りだつたが、たうとう美津江が七つの年の初夏、亡くなつてしまつた。

その後、間もなく迎へたのが今の義母で、翌年、欣一が生れたが、美津江は欣一のことを、眞實の弟よりも以上に、深く愛してゐるにもかゝはらず、義母との間は、どういふものか、しつくり行かなかつた。べつに表面に現はれて、何か争ふといふやうなこともなかつたけれども、兩方で打ち解けなかつた。假りにも義理の母子らしいやうな様子など見えないばかりか、二人の間が、氷のやうに冷やかなことは、一眼でわかつた。

さればこそ、毎年夏になつて、避暑に行くのにも、父と、義理の母とは輕井澤の別荘に、美津江と欣一とは葉山の別荘へと、たとへ一ヶ月でも五十日の間でも、親と子が、べつべつの生活をするのだらう。

慎之助には、深い事情はわからなかつたけれども、人間といふものは表面的には、どんなに平和で、幸福さうな生活をしてゐても、その内部に入つて見ると、それ／＼、いろ／＼な事情が伏在してゐるものだ、不思議な氣がせずにはゐなかつた。

二

「欣一さま〜。」

と、この時内から、誰か召使の呼んでゐる聲が聞えた。

「さあ。お召し換へをなさいませんと、汽車のお時間が、遅れるぢやございませんか。」

「汽車ぢやないよ。——電車ぢやないか。」

欣一が言ふと、召使は、

「電車でも、同じことでございますわ。——やつぱり、お時間があるんでございますもの。」

と、言つた。

「遅れたつて、大丈夫だい。二十分おきに出るんだもの。——たつた二十分遅れる切りさ。」

「まあ。」

召使は、下の縁側まで出て來てゐるらしく、さう言つて呆れたやうに溜息を吐くのが聞えた。

「欣一君。——行くんだつたら、早く支度したはうがいいよ。」

と、慎之助が微笑をふくんで注意すると、欣一は、

「宮内さんは、何を言つてゐるのさ。——自分こそ、早く支度しないと、イケないぢやないの。」

と、言つた。

「えつ、僕が〜。」

慎之助は、びつくりしたやうに、思はず聲を弾ませたが、

「僕が、何んのために、どんな支度をするんです？」

と、苦笑した。

「葉山へ行く支度ですよ。」

「僕が、葉山へ？」

慎之助が、びつくりするのを、欣一は、かへつて不思議さうに、

「さうですよ。宮内さんも、僕といつしよに、葉山へ行くんぢやありませんか。——ですから、宮内さんこそ早く、支度して下さい。」

と、言つた。

「しかし、僕は、ご両親から何んにも、うかゞつてゐないのですが。」

慎之助は、どうしていいのか、わからなかつた。

「パパやママは、どうだつていいんです。お姉さまが、さつきも電話をかけた時に、宮内さんに連れて来て頂きなさいつて、さう言つたんです。」

「本當ですか？」

慎之助が、思はず念を押すと、欣一は、

「本當ですとも。」

と、うなづいて、

「僕、葉山でも、やつぱり宮内さんに、勉強を見てもらはなければならぬぢやありませんか。」と、言つた。

さう言はれれば、さうに違ひなかつた。家庭教師としての責任を負うて、欣一の勉強を見てゐる以上、欣一の行くところには、どこにでも附いて行くのが、當り前である。でも、両親からも、美津江からも、そんなことは、改めて何んにも頼まれてゐないのに、のこ／＼葉山の別荘まで、欣一に附いて行くのは、どうかしら？ と懸念されるのであつた。が、若し、美津江が電話でさう言つたとすれば、いつしよに行くのが、當り前であらう。

「ぢや、お姉さんからの電話を聞いたのは、トシさんですね。」

と、慎之助が聞くと、欣一は焦れつたさうに、

「まだ、そんなことを言つて、疑つてゐるんですか。」と、叫んだ。

「本當ですから、いつしよに葉山に来て。早く、支度しないで、ぐづ／＼してゐたら、遅れるばかりぢやありませんか。」

慎之助は、直接、誰からも頼まれないことが、何んだか心もとない気がしたし、それに召使はゐるとしても、美津江と欣一と二人のゐる別荘に、自分が行くのは、後眼痛い気がした。でも、欣一が焦れてゐるのを見ると、可哀さうになつて、

(さうだ。自分に疚しいことさへなければ、構はないぢやないか。)

と、自分に辯解し、勇氣を揮ひ、とにかく欣一を連れて、いつしよに、葉山に行くことを決心した。

(送つて行くだけで、すぐに引つ返して来たつて、差支へないのだから。)

それでも、まだそんな工合に、自分に辯解しないと、何んとか心にすまないものがあつた。

三

柳田家の屋敷から、葉山の別荘に行くには、自動車で真直ぐに行つてもいいし、それでなければ東横電車で横濱まで行つて、そこから横須賀線の電車に乗り換へるのが、一番便利だつた。

東横線の沿道は、東京近郊で、よく見馴れた景色だつたので、べつに珍らしくもなかつたが、横濱驛で乗り換へて、幾臺も連結した電車が、東海道線を走り出すと、車窓から見る兩側の風光も、がらりと變つたやうな感じで、珍らしくあつた。

「宮内さん、鎌倉だの葉山だの、海岸を、知つてゐる？」

何んとか新鮮な感じで、窓外に移り變る景色に見惚れてゐた欣一は、急に宮内の顔を見た。

「あまり、よくは知らないですね。——慶應にゐた時分に、一二度くらゐしか、行つたことがな

から。」

實際、慎之助は、湘南のはうには、今まで餘り親しみがなかつた。——上野のステエションから東北地方に向つてなら、幾度も汽車で往復したこともあるし、土の色が黒くて、ところどころに、こんもりとした森があつたり、貧しさうな草葎き屋根の家が、その森蔭にチヨボ〜と建つてゐたりする關東大平野の景色なら、眼をつむつても臉の裏側に沁みついて浮んでくるのであつたが、東京驛から南のはう——東海道本線には、小田原より先きまで乗つたことは、まだ一度もなかつたし、その手前までだつて、まづたく一二度くらゐしか往復したことがなかつた。

だから電車が横濱驛を出て、保土ヶ谷をすぎた時分から、あたりの低くうねつた山々のやさしい線や、浅い谷々や、その山々を蔽うてゐる雑木の叢立つてゐる線が、いかにも明るい眞夏の太陽に、くわつと照りつけられ、時々、さつと風が渡つてくる度びに、鞭のやうに細い莖や、それから葉が、身を押し揉むやうにして靡くのが、見てゐると變つた氣分をそゝつて、ほんとうに旅でもしてゐるやうな、新鮮な氣持になるのであつた。

「大船に着いたら、サンドウキツチを買つてね。」

電車がトンネルを出ると、欣一は、そんなことを言つてねだつた。

「買ってあげてもいいけれども……大丈夫？」

慎之助は、微笑した。

「大丈夫ですよ。」

と、言ひながら欣一は、小さな、細い指で、慎之助の大きな手を、甘えるやうに、しきりにおもちゃにしてゐた。

「しかし、お腹をわるくして、やうやく、癒つたばかりのところだから……サンドウキツチなんか、どうかかな。」

「だつて、お姉さまといつしよに行く時だつて、いつでもお姉さまは、買って下さるんですもの。」

「ちや、買ってあげよう。」

「うれしいな。」

欣一は、クツションから飛び上るやうにして、両手をたたいてゐたが、いつの間にか口の中で、軍歌の一節を、上手に歌つてゐるのであつた。

さうかと思ふと、急に、また慎之助のはうを振り向いて、

「葉山へ行つたら、宮内さんも海に入るでせう？」

と、聞いた。

「さあ、どうするかな。折角、海岸へ行くんだから、海水浴してもいいけれども……」

「慎之助が口ごもつて、微笑してためらふのを見ると、どうしたの？」

と、欣一は可愛らしく、首をかしげるやうにした。

「水着の用意も、何んにもして来なかつたものだから。」

「葉山にだつて、ありますよ。誰かのを借りてもいいし。」

「では、入るかな。」

「僕も、いつしよに入りたいな。連れて入つて。」

「君、泳げるの？」

「泳げないや。」

と、羞含むやうに、その蒼白い顔を赧らめると、

「宮内さんは？」

と、聞いた。

「僕は、泳げるさ。」

「ちや、水泳も教へて。」

「教へてあげるとも。」

「うれしいな。」

また、手をたゝいた。——うれしいことがあるといつでも手をたゝくのが、欣一の癖だつた。電車は、その時大船ステエションの構内に入つて、しづかに停車した。

四

柳田家の別荘は、御用邸に近く、南に緩いスロープを持つた丘の上にあつた。テラスからは一瞬の下に、相模灘を見晴らせるばかりではない。——海に向ふに箱根や、大山、丹澤などの山々や、その向ふには、秀麗な富士山が、群峰を抜いて、朝に夕に、刻々に美しい色彩の變化を見せつゐた。

ステエションから、二人を乗せて来たタクシーが、車寄に着いた氣配を聞きつけると、眞先きに美津江が、ニコ／＼して飛び出して来た。

「まあ、よくいらしたのね。——待つてゐたわ。」

と言つて、まるで手を取らんばかりにして、親しみをみせ、うれしさうにして迎へてくれた。

「僕は、参つてもいいのか、どうかと思つたのですが。」

「あら、どうして？」

「實は、そのことについて、何も伺つておかなかつたものですから。」

「まあ、来て下さるのに、決つてゐるぢやないの。」

「はあ？」

「欣一が来る以上は、宮内さんも、いつしよに来て下さらないつていふ法は、ございませんわ。」

「はあ。」

「それなのに宮内さんはね、僕が、いつしよに来て下さいつて、おねがひするのに、どうしたらいいかつて、迷つてゐらつしやるんですよ。」

欣一が、姉に言ふと、

「まあ。」

と、美津江は笑つてゐた。

「お姉さま、お土産。サンドウキツチなんです。——宮内さんにねだつて、買つていたよいたのよ。」

と言つて欣一は、サンドウキツチの折を、大事さうに二つ持つてゐたのを、美津江の前に差出

した。

買ふことは買つたけれども、食へず持つて来たのである。

『まあ、ご馳走さま。うれしいわ。わたし、大好きなの。』

婉然と微笑した眼で、宮内が羞含んだやうに俯垂れてゐるのを、チラと一瞥したが、

『さあ、こちらにいらつしやいな。今、お客さまが来てゐらつしやるところだから、ちやうどいの。宮内さんも、いつしよになつてね。』

と、美津江は先に立つて、見晴らしのいいサロンに導いたが、そこには四人ばかりの青年男女が集つてゐた。

男が三人に、令嬢が一人だつたが、いづれもブルジョアの子弟であることは、その風貌や、身装を一眼見ただけでも、すぐに感じられた。

サロンの隅に据ゑつけてあるエレクトロラからは、ラローのスペイン交響曲のメロディが、しづかに流れてゐた。

海と闘ふ者

一

午前中は、欣一の勉強を見て、午後は、海に行つたし、夜は自分の勉強をしたし、慎之助の日々の生活は、避暑地に来ても、相變らず規則的で、すこしも惰れるやうなことはなかつた。

その日は、朝からデリ／＼と太陽が照りつけて、涼しい海邊の別荘なのに、部屋の中にじつとしてゐても、じつとりと肌が汗ばんで来るやうな、暑くるしい日であつた。そよりの微風もなせいせぬだらう。そのくせ、海には土用波が立つてゐるのだらう。だう／＼と濱に碎ける波の音が、さながら地を揺するやうにして、丘の上までも、はげしい勢ひで、ひゞいて来た。

『ねえ。大丈夫だから、海に連れて行つてよ。』

午前の勉強をすまし、お午の食事を終つて、しばらく休息すると、美津江は、いつか来てゐた三四人のお友達に誘はれ、水着に着換へると、派手なケープをおつて、別荘の下の海水浴場に降りて行つた。

慎之助は、その日はムシが知らせるといふのか、どうも海に行くのが、何んだか気がすまなかつた。

(今日は、波が荒いやうだから、僕たちは、海に行くのは止さうね。)

と、欣一にも言ひ聞かせ、その代りに庭の廣い芝生で、飛行機を飛ばして遊ぶことに、約束したのだが、やつぱり欣一は、海に行きたがつた。

葉山に来てから、毎日、泳ぐのを練習して、すこしくらゐなら泳げるやうになつたところだつたので、泳ぎたくて／＼堪らなかつた。それに、美津江がお友達に誘はれて、皆なが賑やかに海に行くのを見ると、子供ごころに餘計、我慢が出来なかつた。

庭で飛行機を飛ばして遊ぶのなど、詰らなかつた。
「大丈夫なことがあるものか。ほら、あんなに大きな波の音がしてゐるだらう。土用波だから、怖いよ。」

と言つて慎之助は、欣一の逸るこゝろを宥めた。

「だつて、大勢行つてゐますよ。——お姉さまたちだつて、みんな海に行つたぢやありませんか。」

「お姉さまなんかは、大人だからいいけれどもさ。」

「ぢや、海に行つても、入らなければいいでせう。」

「入らないのに、海に行つても、つまらないぢやないの。」

「ねえ、宮内さん。おねがひだから連れて行つて。」

涙ぐんで頼まれて見ると、さすがに慎之助のこゝろも、うごかないわけにはいかなかつた。

殊に、両親があつても、十歳くらゐまで乳母に育てられて、父や母の愛情を、身に沁みて知ら

ない欣一は、慎之助を實の兄でもあるやうに慕ひ、懐いてゐた。——だから慎之助のはうでも、自然と骨肉の弟にでも對するやうな愛情と、親しみとが湧いてくるのは、當然だつた。

「そんなに、行きたい？」

と、聞くと、

「え。」

と、うなづいて、

「だつて、皆な行つてゐるんですもの……」

と言つて、涙をいつばい漉へた眼で、じつと慎之助の顔を見入つた。

「ぢや、連れて行つてあげるから、氣を附けるんですよ。」

つい慎之助としても、さう言はずにはゐられなかつた。

「本當？」

涙に濡れた欣一の瞳が、急に生き／＼とかゞやいて来る。

「今日は、膝のところくらゐより、深いところに行くと、危ないですよ。」

と、慎之助が注意すると、

「僕、大丈夫です。」

と、欣一はうはの空で誓ふと、もう立ち上つて、
『うれしいな。』
と、手をたゝいた。

二

海に行つて見ると、なるほど波の勢ひは凄まじかつたが、それでも赤や青の派手なビーチ・パラソルは、そこにも、こゝにも、海水浴場の濱いづばいを埋めてゐるし、華やかな水着の女や、日に焼けた男たちが、濱にも渚にも、うよ／＼して、波の音にまじつて、大勢の笑ひ聲や、喋べる聲が、ごちや／＼とひびいてゐた。

さすがに波が高いので、泳いでゐる者は一人もなかつた。大人も子供も、みんな膝きりくらゐのところ、びちや／＼と騒いでゐた。

慎之助は、海水浴場で美津江といつしよになつたが、彼女は、泳ぎには自信がないので、いつでも餘り沖までは出なかつたが、今日は、殊に波が高いので、やつぱり皆なといつしよに、浅い落で、わづかにびちや／＼やつてゐるだけだつた。

『やあ、欣一君、来たのか。』

美津江の友達の清水といふ青年が、身體から滴を垂らしながら、海から上つて来ると、つかつ

かと寄つて来た。

『君、今日は、海に入らないの？』

と、内から水着を着て来たけれども、ぼんやり濱に立つて、面白さうに波に戯れてゐる大勢の人々を、美ましさうに眺めてゐる欣一向つて言つた。

後から美津江も、上つて来た。

『僕、入りたいの。』

と言つて欣一は、おづ／＼と姉の顔や、慎之助の顔を見廻した。

『入りたかつたら、入つたらいいぢやないか。——折角、海に来たのに入らないのは、つまらないよ。』

と、清水は言つた。

『こんな暑い日に、海に入らないなんて、バカ／＼しいよ。尤も、波は少し荒いけれども、深いところまで行かなければ、大丈夫さ。僕たち、美津江さんと、さつきから入つてゐただけでも、潮が温かで、とてもいい氣持だよ。』

清水は、更に、そゝり立てるやうに言ふのであつた。

慎之助は、この大實業家の長男だとかいふ洒落者の青年を、不斷から餘りムシが好かなかつ

た。

お洒落で、氣障で、元氣な若者のくせに、避暑地などに來て、毎日々々、のらりくらりとして遊び暮らしてゐる。慶應の理材料を卒業したといふのだが、定つた仕事を持つてゐるのか、おななのか。とにかく、自分の父が有名な實業家であり、富豪だといふことの自慢を、いつでも鼻の先にブラ下げてゐるやうなところがある。

その上、美津江に氣があるらしく、彼女の後ばかり追つかけて廻してゐることが、露骨に誰にもわかつた。見え透いたお世辭を言つたり、聞いてゐても齒の浮くやうなお世辭を言つて、いかなる機會にでも美津江の機嫌を取り、美津江のために自分が騎士氣取りでゐることが、あり／＼とわかるのであつた。しかし美津江は、特にそれを喜んでゐるやうな様子も見せなければ、殊更に疎んじたり、輕蔑してゐるやうな態度も見せなかつた。

美津江は、誰に對しても同じやうに公平で、愛相が好かつた。人に接する態度でも、待遇でも、決して分け隔てを附けるやうなことはしなかつた。

——慎之助としては、そんなことは、どうでもいいことだつたが、清水に對して、どうにもムシが好かないのを、どうすることも出来なかつた。

その清水が、少年のころを、わざと煽り立てるやうなことを言ふので、苦が／＼しい思ひ

で、つい顔を反けるやうな工合にならずにはゐられなかつた。

『だつて、宮内さんが、波が荒いから、入つては危いから、イケないつてさう言ふんですもの。』
それでなくても、入りたくて堪らないところを、清水にそゝり立てられて、欣一はべそを掻いた。

『宮内君が危いと言つたつて、深いところへ行かなければ、大丈夫さ。——見たまへ、君より小さい子供たちだつて、みんなあゝして入つて、面白さうに騒いでゐるぢやないか。』

『僕も、入りたいな。』

『入れよ。』

『宮内さん、入つてもいい？』

欣一が、それでもためらつて、宮内に聞くと、清水は、

『僕が、連れて入つてやるから、いいだらう？』

と、宮内の返事も待たずに言つて、欣一のはうに兩手を擡げ、

『さあ、來たまへ。僕といつしよに入るんだもの、危なくなんかあるものか。波が來ても、しつかり、捕まへてゐてやるから。』

さう言はれると欣一は喜んで、不斷は好きでもない清水の兩手に、飛び附くやうにして捕ま

た。

三

災厄といふものは、いつ、いかなる時に、突如として襲ひかゝつてくるものか、全く計り知れない。

それは、ホンのちよつとの間のことであつた。

慎之助は、いくら清水がすゝめて、しかも彼自身が欣一を連れて、海に入つたのだとしても、家庭教師としての自分に、何んの責任がなくなるといふわけではない。——若し、何かの間違ひでもあつたら、自分が當然、責任を負はなければならないのだと思つた。

イヤ、今の場合、欣一に對する慎之助の氣持は、單なる義務や責任や、そんな冷やかなものばかりではなかつた。それ以上に、不思議な愛情を持つてゐた。——慕はれ、頼られると、そこに自然の愛情が湧くのは、當然のことだつた。

だから、清水が欣一を連れて海に入つても、清水だけに任せて、自分は知らん顔をしてゐるわけにいかなくなつた。

もちろん、なるべく欣一も海に入れなければ自分も入らないつもりで、海水着にも着換へないで来たのであつたが、欣一が入つた以上、自分も附き添つて入つて保護してやらなければならな

しと思つた。

幸ひ、タオルや、海水着は、ズツクの小さな鞆に入れて持つて來てゐたので、急いで脱衣場のほうに行つて、着換へて來ることにした。

『ちや、僕も、ちよつと着換へて來ますから……』

と、慎之助は美津江に一言斷つて、濱砂を蹴るやうにして、駆け出して行つた。

慎之助が、急いで脱衣場に行つて、海水着に着換へて、再び渚まで歸つて來る間のことだから、たつた三分か、長くて五分とはかゝらないはずである。

その僅かな間に、恐ろしい事件が起つてゐたのだ。

慎之助が、以前のところまで歸つて見ると、大勢の人々が集つて、海のはうに向つて、何かわい／＼騒いでゐるのであつたが、初め、ちよつとの間は、慎之助にも、それが何んのことだか分からないので、つい、ぼんやりしてゐた。

すると、波が、膝くらゐのところまで、はげしい勢ひで這ひ寄つて來る海の中に立つて、向ふを向いて、何か氣違ひのやうになつて叫んでゐる美津江の姿が眼に附いたので、慎之助はハツとした。

『どうしたんです？』

と叫びながら、慎之助が人々を掻きわけるやうにして、びしやびしやと波を跳ね飛ばしながら、美津江の傍まで駆け寄って行くと、その聲が、聞えたのだらう。

「あつ、官内さん！」

美津江は振りかへると、必死に叫んだが、その顔の色は、死人のやうに眞蒼に、美しい眼が釣り上つて、行きなり慎之助の胸にでも、飛びついて来るのではないかと思はれるやうな、一生懸命さだつた。

「欣一が……」

と、言ひかけて美津江は、急に暗にでもなつたやうに後の言葉がつかず、涙の乾いたやうな、キラ／＼と氣味わるくかゞやいた眼で、祈るやうに熱心に、慎之助を見つめたと思ふと、沖のはうを振り返つて、指差すのであつた。

「えつ、欣一君が、どうかしたんですか？」

さつと慎之助の顔色が變ると同時に、胸がとどろいた。

『助けて……助けて。』

やうやく、干からびたやうな聲を、絞るやうにして言つたと思ふと、双の瞳から、初めてハラハラと涙がこぼれた。

「欣一君が、波に攫はれてしまつたのだ。危ふく僕も引き込まれるところだつたが……やうやく、這ひ上つて来たんだが……」

それまで慎之助は、氣が附かなかつたけれども、美津江の傍に、濡れ鼠のやうになつた清水が、紙のやうに蒼ざめた顔色をして、しよんぼり立つてゐたが、おど／＼と、蚊の泣くやうな細かい聲で、吃り／＼事情を説明した。

皆まで聞く必要もなく、すべての事柄が、ハッキリと電光のやうに、慎之助の頭脳に閃いた。

ちやうど、それと同時に、美津江が向いてゐる沖のはうに彼等が立つてゐるところから、五六メートルばかり離れた先に、何か黒い、小さなものが、ぼつかり浮んだのが、蒼く蒼く透きとほるやうに澄んだ潮に透けて、ギラ／＼と光つてゐる太陽の光りの下に、チラと見えた。

『あつ、欣一が……』

と、美津江が悲痛な聲を振りしぼるやうにして叫んだ時には、それは慎之助の網膜にも、しつかりと焼きつくやうに、映つてゐた。

『早く！ 大急ぎで、醫者を呼んで来ておいて！』

慎之助は、後になつて考へて見ても、どういふつもりで、その時、そんなことを言つたのか、さつぱりわからなかつたけれども、とにかく、何か本能的に、誰に向つてもなく叫んだ時に

は、逆巻く波を眼がけて、敢然と身を躍らしてゐた。
白く泡立つ波頭が、繰返し／＼折れてゐる波元を、瞬く間にぐり抜けたかと思ふと、大きな波が、幅廣いうねりを見せてゐる海の上を、慎之助は颯爽として、見事な抜き手を切つて、沖へ／＼と泳いで行くのであつた。――濱からは何も見えないけれども、慎之助は、たしかに沖へ／＼と引つ張られてゆく何かを認めて、それを追つかけて行くのに違ひなかつた。
郷里の中學校では、慎之助は水泳の選手だつたので、スポーツのうちでも、水泳だけは自信があつた。

恐ろしき出来事

一 一兩日中に、父と義母とが揃つて、二三日の豫定で、葉山の別荘に来るからといふ通知を、今朝、家扶から受取つたばかりのところだつた。

柳田伯爵家のためには、たつた一粒種の男の子、天にも地にも掛け換へのない嗣子の欣一である。

その欣一に、(若しも)のことでもあつたら、美津江を初め慎之助だつて、その他の召使たち

も、そのまゝでは、すまされないとこゝろだつた。

——そんな責任上の問題は兎にかく、美津江も慎之助も、限りなく欣一を愛してゐるのだから、若し、欣一の身に不慮の不幸が襲ふやうなことがあれば、二人とも、安閑として生きてはゐられなかつたところかも知れない。

とにかく、慎之助の決死的な勇氣と、冒険とに依つて、力強く、早い潮脚で、ぐん／＼沖に持つて行かれる欣一を、どうにか捕まへることが出来たけれども、その時には、二三度波に叩きつけられた欣一は、もう死んだやうに、ぐつたりとなつてゐた。——恐らく慎之助が助けることが、もう二三分も遅れてゐたら、欣一の身體は、永遠に靈を失つた冷たい死骸となつてしまつてゐたことだらう。

それには、慎之助が海に飛び込んでゆく時に、(早く、醫者を呼んで来ておくやうに。)と叫んだことも、欣一の生命を救ふ上には、大きな役割を演じた。

慎之助が、左の脇に欣一の身體を、しつかりと抱へて、人々に助けられて、やうやく濱に這ひ上つて来た時には、欣一は既に息絶えてゐた。

若し、駆けつけて来てゐた醫者が、待ち構へるやうにして、人工呼吸をしたり、水を吐かせたり、應急の手當てをしなかつたら、慎之助が自分の生命を賭して、いくら助けて来て、欣一は

息を吹き返すことが出来なかつたらう。

そればかりではない。慎之助も歸りの波打ち際で、二度ばかり烈しい波に叩かれて、不覺にも少しばかり潮水を飲んだし、しつかりと抱へてゐる欣一を、醫者に渡したと思ふと、そのまゝ、じり／＼と太陽の熱に焼けた砂濱の上に、氣を失つて、バツタリ倒れてしまつた。

美津江は、急に、二人の看病をしなければならぬことになつた。

『いかゞでせうか？』

醫者は海岸から、すつと附き切りに附いて来てくれた。

階下の廣い、涼しい洋室に、ベッドを二つ並べて、一つには欣一が、一つには慎之助が、横はつてゐた。

慎之助は、ブランディか何か、昂奮性のアルコール分を少量飲まされて、健康さうな寢息を立て、さつきからよく眠つてゐるので、ちつとも心配するやうな容態ではなかつたけれども、欣一のはうは、醫者も首をかしげるくらゐ不安だつた。

『さあ。』

いくら聞かれても、醫者にもハツキリしたことは言へないので、曖昧に返事をする、首をかしてゐた。

『どんな様子でございませうか？』

美津江は、父や義母が来るまでには、どうかしてさつぱりと癒つてゐてくれるやうにと、そればかり祈つた。——慎之助のおかげで、助けることは助けたが、このことが義母にわかると、どんなに意地のわるいイヤ味を言はれなければならないかも知れない。それも自分に對してばかりではない。慎之助や、その他の召使に對しても、どういふ態度に出るかわからないのである。身分の高い貴族の家から來た義母は、こまかい人情などはわからず、人に對する思ひやりもなければ、たゞ、氣位ばかり高くて、濫かみなどはすこしもなかつた。美津江は、斯ういふ災厄のため、若し、慎之助や、その他の召使などに、義母が冷酷な處置でも取るやうなことがありはしないかと思ふと、それを思つたばかりでも、辛かつた。

『さうですな。——さつきから、べつに、變つたところもありませんが。』

醫者は、欣一の手首を握つて、脈を見ながら答へた。

欣一は、死んだやうにくつたりとなつて、草の葉のやうに、蒼ざめた顔色をしてゐた。が、死んでゐない證據には、ただ、弱々しい、かすかな呼吸を、ほそぼそと通はせてゐるのでわかつた。

いつの間にか、日が次第に暮れて、窓の外が暗くなつて來たと思つたら、月が出かゝつたのだ。

らう。東側の窓硝子が、ほのかに明るくなつて来てゐた。
電燈の強い光線を避けて、部屋の照明は、暗くしてあつた。

二

慎之助が、ぼつかり眼を開いて見ると、美津江が一人、欣一のベッドの傍に、付き添うてゐた。

眠るだけ眠つたと見えて、気分もさつぱりしてゐたし、眼を覺ました直後にもかゝはらず、頭腦が冴えてゐたが、記憶だけが、ボカンと穴でもあいたやうになつて、すぐには、何が何んだかわからなかつた。

——自分は、廣い／＼部屋のベッドの上に横はつてゐるし、傍らのベッドには、欣一が寝てゐる。

(どうしたのかしら?)

と、考へて見たけれども、咄嗟には思ひ出せなかつた。

『お眼ざめ?』

と言つて美津江は、薄暗い照明の中に、夕顔の花のやうな顔をして、ニツコリと微笑した。

『どうしたのでせう?』

と聞いて、慎之助はウロ／＼と、邊りを見まはしてゐた。

『何がですの?』

と言つて美津江は、訝かしさうに眉をひそめた。

『どうして僕は、こんなところに寝てゐるのでせう?』

『あら。』

と、美津江は呆れたが、すぐに心配さうに顔を曇らせて、

『何んにも、覺えてゐらつしやらないのでせうか?』

と、つぶやいた。

『どうも、僕には、さつぱりわからないのですが。』

と言つて、慎之助が空虚な眼つきをして、苦笑すると、

『欣一が、海に溺れたんですわ。——それをあなたが、飛びこんで行つて、助けて下さつたんぢやありませんか。』

美津江は、若しかしたら慎之助が、気がへんにでもなつたのではないかと、不安のために胸をとどろかせながら、そつと椅子から立ち上つて、慎之助の傍に、しづかに寄つて来た。

『あつ。さうでした。』

慎之助の心に、恐ろしい記憶が、生き／＼として思ひ浮ぶと同時に、不意に大きな聲を出した。

『それで、欣一君の様子は、どんな具合ですか。』

と、美津江に聞きながら、上半身をベッドから乗り出すやうにして、欣一の顔を覗いて見ようとした。

『大丈夫ですの。お医者さまも、さつき、お歸りになつたところですよ。』

『さうですか。助かりましたか。』

『ええ。おかげさまで。』

と、美津江はしづかに言つたが、涙ぐんでゐた。

『眠つてゐますか？』

慎之助が、それでも不安さうに聞くと、美津江は、

『ええ。』

と、うなづいたが、

『何んですか夕方から、すこし熱を出してゐますの。』

と、言つた。

『それで、お医者さんは、何んと言ふんです？』

『すこし経過を見ないと、わからないけれども、べつに、大したことはないだらうと、おつしやるのですけれども……でも、何んだか心配で。』

『さうですか。』

と、慎之助は頷いて、ちよつと考へてゐたが、

『今、何時でせう？』

と、聞いた。

『さあ。十二時すぎて、もう一時に近くはないでせうか。』

『そんな時分ですか。僕は、ちつとも知りませんでした。』

と言ふと、慎之助はさつきと起き上つて、ベッドから降りると、

『僕が、欣一君には附いてゐますから、すこしお休みになつたら、いかゞです？ お疲れになつたでせう。』

と、やさしく勧めた。

『いゝえ。あなたこそ、ご無理をなすつては、イけませんわ。』

と、美津江がハラ／＼して、心配さうに眉をひそめると、

『イヤ、僕は、もう大丈夫ですから、僕が代つて、附いてゐますから、あなたは、どうぞおやすみ下さい。』

慎之助は、歩くと少し頭がフラ／＼するやうであつたが、でも、元氣に言つた。——いつか柳田家の門のところで卒倒した時には、まる四日間といふもの、やさしい美津江の深切な介抱を受けたが、その時の感謝を、慎之助は一生忘れることが出来ないだらう。だから、いついかなる時でも、美津江のためなら、たとへ火水の中に飛び込んでもいいと、覺悟してゐるのであつた。その美津江が寝ずに、欣一の看病をしてゐるのに、慎之助は自分だけが安閑として、ベッドの上に横になつてはゐられなかつた。

三

『宮内さん／＼。』

ハツキリした聲で呼ばれて、慎之助はハツとして、

『えつ、どうしたの？ 僕は、こゝにゐますよ。』

と、椅子から立つて行つて、顔をのぞいて見ると、欣一は、くるしさに眉をしかめて、すや／＼と眠つてゐる。熱があるらしく、顔色が仄かな赭らみを帯びて、呼吸が、かなり早い。

『どうしたんでせう？』

いつの間にか美津江も寄つて来て、心配さうに聞いた。

『さあ。——きつと、熱のために、うなされてゐるんでせう。』

『弟は、あなたがお許しにならないのに、海に入つたりして、悪いことをしたと思つて、良心が咎めてゐるんですわ。』

『僕も、わるかつたのです。青木さんが、何んと言つてすゝめても、欣一君が海に入るんなら、僕も、いつしよに入れば、よかつたのです。』

『宮内さんが、わるいなんて、そんなことないわ。』

美津江は、強く否定したが、ベッドの端においてある慎之助の手の上に、いつとも知らず載せてゐた彼女の手に、思はず力が入つたので、それまで、何んにも氣が附かなかつた慎之助は、ハツとして、全身の血管の血が、一時に逆流するやうな氣がした。

欣一が波に攫はれた時にも、慎之助の全精神は、はげしいショックを受けたが、今のショックのはうが、もつとはげしいのではないかと思はれるほど、胸がドキ／＼した。——故意か、偶然か、わからないけれども、まつたく恐ろしい出来事だつた。でも、急いで手を引つ込めるのは、何んだかわるいやうな氣がして、慎之助は、氣をわく／＼させながら、そのまゝ、じつと辛抱してゐた。

すると、また欣一は、突然、

『かんにんして……かんにんして。僕が、わるかつたのですから。ね、宮内さん……』
と、ハツキリ言つた。

かなり熱が高いらしく、せい〜と呼吸づかひがくるしさうで、顔が紅くほてつてゐたが、固く閉ぢた臉から、涙が糸を引いて、流れてゐた。

女 と は

自動車は、熱海から十國峠を越えて、箱根に出た。

日金山にも上つたが、夏だといふのに、空がよく晴れて、富士山が、眉に迫るやうに、近々と見えた。

慎之助は、こんなに美しい富士を、こんなに間近く見るのは、生れて初めてだつた。富士山の美しさ、眞に日本の靈峯としての威容に打たれて、しばしの間は、たゞ眼を見張るばかりで、口もきけなかつた。胸の底から、大きな感激を受けて、息を呑むやうにして、立ちつくしてゐた。
『まあ、素的！』

誰だか、そつと傍に寄つて来て、肩を並べて立つたと思つたら、感嘆の溜息を吐いたのは、美津江だつた。

慎之助は、なるべく美津江を避けるやうにしてゐる。いつか、欣一を海から助けた、あの夜以來のことである。

それなのに美津江のはうでは、何とか彼とか言つては、慎之助に接近する機會を作つた。懐しさうに、親しさうに、傍に寄つて来ては、いろ〜なことを話しかけるのであつた。

でも、それは慎之助に取つては、まことに迷惑なことだつた。——いつもなら何氣なく、避けてしまふのだが、山の上では、さうも行かなかつた。

早く、清水や、欣一が、上つて来てくれ〜ばいいと思ふのに、二人とも、何をぐづ〜してゐるのだらう。振返つても、まだ自動車の附近で、まご〜してゐるのか、近くには見えなかつた。

『全く、美しいですな。』

慎之助は、固くなつて言つたが、美津江と二人切りでは、この立派な富士山を、落着いて見てゐる氣にもなれなかつた。——急にそは〜した。

『わたし、富士登山がして見たくなつたわ。あの山の頂上に立つたら、どんなに愉快でせう。』

美津江はさう言つて、はげしく胸を弾ませてゐた。

『さうですな。』

『いつしよに連れて、上つていたゞけないかしら。』

『二人切りですか？』

『えゝ。』

と、強くなづいたが、美津江は首をかしげるやうにして、

『それとも、二人切りでは、何かご都合でもわるいことがあるの？』

と、媚びるやうに、怨ずるやうに、凄艶な眼ざしをして、じつと慎之助の顔を見つめてゐた。

『いえ。都合がわるいなんで……決して、そんなことはありませんが。』

慎之助は、怨みがましく言はれると、あわてゝ言ひわけせずにはゐられなかつた。何んと言つ

ても美津江は、慎之助のためには大恩人である。恩人の感情を害したり、氣持を損つたりするこ

とは出来なかつた。

『さう。それなら、早くいつしよに、登山したいわ。』

『はあ。』

『天氣の都合で、二三日のうちには、どうかしら？』

『さうですな。』

『明日は、父も義母も、軽井澤へ歸つてしまふのよ。』

『さうですか。』

『ですから、その後だつたら、わたし、いつでもいいの。』

『……………』

『早うほど、さうわ。』

『……………』

『あら、どうなすつたの？ 急に、黙つてしまつて。』

『それよりも、欣一君は、どうしたのでせう？』

『すぐに、上つて来るわ。』

『僕、ちよつと迎ひに行つて、連れて來ませう。』

言ふなり慎之助が、もう駆け出さうとするのを、美津江は、

『宮内さん！』

と、鋭く呼び留めた。

二

『はあ。』

慎之助は、立ち留まらなければならなかつた。

富士登山の約束なんか、ハッキリしない中に、この場をのがれてしまひたいと思つたのである。が、慎之助のその苦心も、水の泡だつた。

『卑怯よ！ あなたは。』

と叫んで美津江は、慎之助を睨むやうに見て、息を弾ませてゐた。

『どうして僕が、卑怯ですか？』

慎之助は、卑怯と言はれた言葉が、ぐつと胸に來た。振り返るとき、つとなつて、反問した。

『だつて、ハッキリ約束もせずに、逃げ出さうとなさるんでは？』

と、美津江は急に弱々しくなつて、かすかに、怨みを籠めて言ふと、涙ぐんだ臉を伏せた。

さう言はれると、まつたくその通りなので、慎之助は一言もなく、しばらく黙つて、俯垂れてゐたが、

『僕は、欣一君のことが、氣になつたものですから。』
と、おづく辯解した。

『SSのよ。欣一のこと、今、心配していただかなくても。』

『しかし、僕は、欣一君に付き添つて來たのですから……欣一君にたいしては、僕に責任がありますから。』

さうは言つても、必ずしも責任だけではなかつた。

慎之助は、自動車から降りると、つい真先に駆け上つて來てしまつたけれども、こんなに、いつまでも欣一の姿が見えないと、やつぱり心配になつた。

『欣一には、清水さんと、運転手が附いてゐるわ。』

『ですが、どうしたのでせう？ 今まで上つて來ないなんて。』

『心配しなくても、大丈夫よ。こゝは海ぢやないから、波に攫はれるなどといふ心配はないわ。』

『しかし、やつぱり……ちよつと見て來ませう。』

『富士登山には、連れて行つてくださるの？』

『……』

『ハッキリ返事もせずに、逃げてしまふのは、卑怯だわ。』

『ハッキリ返事をすれば、いいのですか。』

『ええ。』

『では、お断りします。』

『えつ。』

『僕は、欣一君の家庭教師として、雇はれてゐるのですから。』

『だから、あたしのおねがひなんか、聞いて下さらないの。』

『欣一君の勉強だつて、かなり遅れてゐるんです。』

『宮内さん。』

『えつ。』

『あなたは、そんなに、わたしがお嫌ひなの？』

美津江の涙ぐんだ眼が、必死になつて慎之助を見つめてゐた。長い睫毛がブル／＼と、かすかに顫へて、黒い瞳が、焰のやうにかゞやいた。

『……………』

でも、そんなことを面と向つて聞かれても、咄嗟に、ハッキリ答へられるはずはなかつた。

『わかつてゐるわ。』

美津江は、獨り言のやうに、かすかに呟くと、

『あなたは、わたしがお嫌ひなのよ。わたしを嫌つてゐらつしやるんだわ。だからこの頃は、いつでも、わたしを避けてゐらつしやるのよ。』

と、掻き口説いたと思つたら、ブルーのオーガンデイで、上手に仕立てたケープレットを着た華奢な肩が、傷々しく慄へてゐるのが見えた。——怨みと、かなしみに打ちひしがれたやうになつて、泣いてゐるのである。

慎之助は、どうしたらいいのか、すつかり慌てゝしまつた。

『僕が、あなたを嫌ひだなんて……そんなことはありません。』

と、慎之助はムキになつて、吃り／＼辯解した。

三

『ほんとう？』

今、泣いて、涙に濡れた眼が、もう微笑をふくんで、慎之助の顔を、流し眸に見上げた。

さう眞正面から聞かれると、慎之助も、ついタジ／＼となつたが、

『はあ。』

と、答へた。

嫌ひでないことは事實だし、助けられた恩も感じてゐる。だが、たゞ、進んで愛する氣持になれないといふだけである。それは、單に美津江にたいしてだけではない。慎之助は、女といふものが信じられなかつた。どんなに固く約束し、誓つても、いざといふ場合になると、女のこゝろ

といふものは、どう變るか分からない。

空を飛んでゐる雲と同じやうに、女のこゝろぐるゝ掴み難く、捕へどころのないものはない！
あんなに固く誓つた美登里すら、裏切つたではないか。

爾後、慎之助は、女の言ふことなど、信じないことに決めてゐる。立ち入つた交渉など持たず、愛したり、戀したりしないことに決めてゐる。

『わたしを嫌つてゐらつしやらないのだつたら、なぜこの頃になつて、急に、わたしをお避けになるの？』

美津江は、その點が腑に落ちないらしく、追及した。

『それは、あなたに對して、僕が、危険を感じるからです。』

慎之助は、正直に答へた。

『あなたが、わたしに對して、危険を感じるつて？』

『はあ。』

『それは、どういふ意味？』

『……………』

『つまり、わたしが、あなたを誘惑でもするやうに、誤解してゐらつしやるのぢやないかしら。』

『……………』

慎之助は、さうだとも、さうでないとも言はなかつた。

『わたし、そんな不良の女に、見えるかしら。』

『僕は、お嬢さんを不良だなんて、そんなことは思つてゐません。』

慎之助は、キツパリ言つた。

『さう。』

美津江は寂しさうな微笑をふくんで、かるく頷いたが、

『ぢや、どうしてそんなに、危険を感じるの？』

と、聞いた。

『僕が、危険を感じるのは、必ずしもお嬢さんに對してばかりではありません。どんな女に對しても、危険を感じないわけにはいかないのです。』

『まあ。』

美津江は、呆れたやうに眼を見張つて、慎之助を見た。

慎之助としては、一旦、言ひ出した以上、すつかり言はずにはゐられなかつた。

『僕は、すべての女の人に、危険を感じるのです。』

『どうして？』

『僕は、すべて女の人を、恐ろしいと思つてゐます。』

『まあ。』

美津江は、慎之助の言葉を、聞けば聞くほど意外だつた。

『だから僕は、どんな女の人になりたいしても、決して心を許しません。出来るだけ警戒してゐます。』

『なぜ、そんな必要があるの？』

美津江は、初めて慎之助の心の秘密の一端に觸れたやうな気がして、一生懸命に聞かすにはゐられなかつた。

『……………』

でも、慎之助は唇を噛みしめるやうにして、黙つてゐた。

『それには、何か原因なり、理由なりがあるのでせう？』

『それは、理由はないことはありませんが……………』

と言つたが、そんな理由なんか、今更、話す氣にもなれなかつた。話すのも、むしろ苦痛だつた。

『聞かせてよ。わたし、その理由が聞きたいわ。』

『ですが、そこまでは、聞かないでいたゞきたいのです。』

『なぜ？』

『それは、僕の心の秘密に屬することですから。』

と言つた時、慎之助は思ひ出しても、胸が煮えくり返るやうな口惜しさのために、思はず涙ぐんだ。

涙は不覺にも、二滴三滴と、頬を傳つて流れた。

四

美津江の眼が、不思議さうに、でも、何かに烈しく胸を打たれたやうに、眞摯なかとやきと、深い同情とを湛へて、じつと慎之助の涙を、見つめてゐた。

『さう！』

一つ強くうなづいたと思ふと、美津江は自分も誘はれたやうに、つい涙ぐんで、慄へる聲で、『あなたは、誰か女の人に裏切られたのね。——失戀したことがあるものだから、それで、すべての女の人にたいして、そんな絶望的な考へ方をしてゐるのね。きつと、さうだわ。』と、言つた。

「……………」

でも、慎之助は、何んとも答へなかつた。たゞ、かなし氣な、何かを懇へようとしてゐるやうな、切ない眼が、チラと美津江の顔を見たと思つたら、すぐにまた、その眼は力なく伏せられてしまつた。

『ですが、宮内さん。』

と、美津江は優しく、改つた調子で呼びかけて、

『女といふものが、すべてそんなに悪いものか、どうか？ 信じることも頼ることも出来ないものか、どうか？ 見てゐらつしやい。今にわかるから！』

と、何か自信あり氣に力をこめて、明るく言ふと、劬はるやうな慈悲ぶかい眼ざしが、さもさも愛しみ、愛撫するやうに、しげ／＼と慎之助を見入つた。

そこへ、思ひがけぬ方角から、突然、欣一を先頭に、清水、運轉手の三人が、息を切らして上つて來た。

『お姉さま。これ、とてもきれいでせう。どつさりあるの。』

欣一は、美事に咲いた山百合の花や、遅咲きの山つゞじの花を、胸いつばいに抱へ込んでゐた。

『宮内さん。葉山に歸つたら、先生のお部屋にも挿してあげますから。』

欣一は、興奮して、眞赤な顔をしてゐた。額からも、襟首からも、玉のやうな汗が、流れてゐた。

『それは、どうもありがたう。』

慎之助は、皆なが近づいて來ると、美津江の傍から、一二歩、自分の身を引き離すやうにしたが、

『どうしたのかと思つて、心配してゐたのです。』

さう言ふ後につゞいて、美津江も何氣なさうに、

『もう少しで、宮内さんは、探しに行つて下さるところだつたのよ。——わたし、大丈夫だからといつて、お留めしてゐただけでも。』

と、言つた。

それは何んだか、慎之助と自分とが、さつきから二人きりでこゝにゐたことに、欣一や清水の手前、何か疚しさでも感じて、辯解してゐるやうな調子だつた。

清水は、自分の責任から、欣一をあんな目に逢はせて以來、さすがに面目なく感じたのだらう。

以前のやうに露骨には、美津江の後を追つかけて廻さなくなつてゐたが、また、この頃では、何かと口實を設けては、美津江に付き纏ふやうになつて来た。咽喉元すぎれば、熱さを忘れるといふ言葉の通りである。今日のドライブも、まつたく清水の提案で、運転手も、自分のところのお抱へであり、自動車は自家用のパツカードだつた。——その他、何彼につけては、美津江の歡心を買ひ、取入らうと苦心してゐた。欣一の機嫌を取るのも、そのためだつた。

『僕は、欣一君のお守で、まつたく閉口してしまつた。』

清水も、胸いつばいに花を抱へてゐた。五十圓とか出して買つたといふ自慢のノツクスのネクタイも、皺くちやになつて横に曲り、イタリイ製の高價なソフトも、型が臺なしになつて、額や、鼻の頭が、びつしより汗に濡れてゐた。

『欣一君ときたら、箱根の山中の花を、取つて持つて歸るつもりでゐるんだもの。まゐつてしまつた。』

と、今にも泣き出しさうに、べそを掻いてゐた。

湖上にて

『ホラ、また釣れた。』

『わたしもよ。』

『僕も。』

『どうだ、こんなに大きなヤツが……凄く引きだつた。』

『あら、素的……また、かゝつたわ。宮内さん。』

一時の間といふものは、釣り上げた魚の腮にかゝつてゐる鉤を外すのも、悟かしい有様だつた。

こんなのを、入れ喰ひといふのだらう。日金山を降りると、また自動車を飛ばして、關所跡を通り、元箱根に出て、蘆の湖畔の箱根ホテルで休憩したが、夕食は、こゝですまして、日が暮れてから涼風に吹かれながら、葉山へ歸つて行く豫定だつた。

晚餐までには、まだ五時間もあるので、蘆の湖上に舟を浮べ、ブラック・バス釣りに打ち興じてゐるのであつた。

はるかに望む浮島のやうな離宮の島。空が冴え切つてゐるので、有名な逆さ富士も、さながら湖底に富士山が聳えてゐるやうに、くつきり見えてゐる。

湖尻のはうへ、通ふ遊覧船の發動機の音が、ボン、ボン、ボン／＼と、水面を傳つて、遠くか

らまで、くつきりと聞えてくるし、大気が澄み切つてゐるので、視野が、とてもよく利いた。物の形や、人の姿などが、小さく／＼なるまで、ハッキリと見えるし、話し聲や、笑ひ聲や、物のひびきが、かなり遠い距離からでも、不思議なほど明瞭に聞えてくるのであつた。

双子山や、駒ヶ岳や、冠岳なども、澄み切つた大空の下に、鮮やかな線と、妙なる美しい色彩とで、ぼつかり浮んでゐるのであつたが、皆なは、さういふ美しい景色も、見たり、味つたりしてゐる餘裕などなかつた。たゞ、ブラック・バスを釣るのに、夢中になつてゐた。

だが、どういふわけか、清水の釣だけに、一向、魚がかゝらない。

『バカにしてゐやがる！ ちつとも面白くない。』

初めは、釣れなくても、何とか彼とか、負け惜しみを言つてゐた清水も、だん／＼ブリ／＼怒り出した。

眉と眉との間に、氣むづかしい堅皺を深く刻んで、忙しさに、面白さに釣り上げる他の人々の手許を、妬ましさにチロリと見ては、忌々しさに舌打ちをする。——清水としては、他の人々には、いくらでも釣れるのに、自分一人が除け者にでもされたやうに、ちつとも釣れないことが、忌々しく、妬ましいばかりではない。美津江の手前、きまりがわるく、恥しかった。何となく面目ない氣がした。

『釣れないはずは、ないのですがね。若しかしたら、タナがちがふんぢやないのでせうか？』

慎之助が、同情して聞くと、それがまた、清水の癪に障つて、

『タナつて、何だい？』

と、怒つたやうに言つた。

『つまり、魚のゐる層のことですよ。魚がゐる層よりも、鉤が上でも、下でも、魚が喰はないわけです。』

『何んだ、そんならさうと。早く教へてくれ、ばいばいのに。』

清水が、そんな憎まれ口をきくと、欣一は笑つて、

『清水さんは、不器用なんだよ。——それくらのことは、自分で氣が附くはずなのに。』

と、無遠慮に言つた。

『そんなことを言つたつて、そいつは無理だよ。』

『どうして？』

『僕は、漁師ぢやないもの。』

『漁師でなくたつてさ。』

『田舎者ぢやなし、今まで、一週も釣りなんかしたことはないもの。』

『清水さんは、をかしたことを言ふんだね。』

と、欣一は美津江のはうを見ると、くすりと笑つた。

『だつて、本當だもの。』

清水は、ムキになつて言つたが、もう誰も、餘りに馬鹿々々しいそんな言葉などに、相手になる者はなかつた。

二

慎之助の注意で、綸の丈を變へて見てから、清水も七八尾くらゐは釣つたであらうか。それからバツタリと、魚の喰ひが留まつてしまつた。

時刻の關係か、それとも、ブラック・バスの群れが、どこかへ移動してしまつたのか、誰の釣にも、一尾もかゝらなかつたし、コツリとも當らなかつた。

『つまらないから、釣りなんか、もう止さうや。』

と言つて清水は、綸を引きあげると、舟の中に、ごろりと仰向きに、引つくり返つてしまつた。

皆なで、いつしよに魚を釣つてゐて、たつた一人でも、竿を投げ出してしまつたりする者があると、それで興味は、半減されてしまふ。

『ぢや、止ませうか。こんなに澤山釣つたんですもの。』
と、美津江が言つた。

『さうですね。——もう止めても、いいですね。』

慎之助も、賛成した。

『釣れなくなつたから、止したはうがいいよ。それよりも今度は、舟を漕いで遊ぶはうが、面白うや。』

欣一は、言つたかと思ふと、綸を上げてしまつた。

それから今度は、しばらく舟を漕いで、湖上で遊び耽つた。そのうちに棧橋まで漕いで歸ると、ちやうど湖尻まで行く遊覧船が、間もなく出るところだつた。それを見ると急に欣一が、それに乗りたと言ひ出した。

時間を聞いて見ると、湖尻で一時間半ばかり待つてゐるうちには、この船が、また引つ返してくるといふことだつた。それだと、ちやうど晚餐の時間に間に合つて、都合がいいことになる。

『では、湖尻まで、行つて見ることにしませうか。』
と、美津江が言つた。

『はあ。』

欣一のお伴で、附いて来てゐる慎之助としては、決して、異存があるはずはなかつた。欣一が行くといふところなら、どこへでも附いて行かねばならない。

「僕は、イヤだな。湖尻になんか、何度も行つたことがあるんだもの。ちつとも、珍しいことなんかないや。」

気がすまないので、獨り清水だけだつた。

「それよりも、ホテルに歸つて、涼しいペランダで涼みながら、冷たい紅茶でも、飲みたいな。」

「ぢや、清水さんは、一人でホテルで待つてゐるといふ。」
と、欣一が言つた。

「美津江さんは？」

清水の氣になるのは、美津江がどうするかといふことである。

「お姉さまは、もちろん、僕たちといつしよに行くのさ。」

「欣一君に、聞いてゐるんぢやないよ。——僕は、美津江さんに、聞いてゐるんぢやないか。」

清水は、躍起になつて、小さな者を、怒りつけるやうに言つた。

「わたしは、欣一といつしよに、遊覧船に乗つて行きますわ。」
と、美津江は、しづかに言つた。

「それと見。」

欣一は、勝ち誇つたやうに言つて、手を叩いた。

でも、清水は、欣一なんか、頭から問題にしないやうに、

「遊覧船に乗るなんて、つまらないぢやありませんか。」

と、言つた。

「でも、欣一が、乗りたいと言つてゐますから。」

「今までに、乗つたことが、ないわけではないでせう？」

「ええ。」

「何遍乗つたつて、同じことですよ。」

「それは、さうですわ。」

「ですから、止したらどうです。欣一君には、宮内君が附いてゐるから、大丈夫ぢやありませんか。」

「わたし、べつに心配だから、附いて行くんぢやないの。」

「ホテルで休んで、冷たい紅茶でも飲んだほうが、ずつと氣が利いてゐますよ。」

「だから、清水さん一人で、さうすればいいぢやないか。」

欣一が、口を挟んだ。

『一人ぢや、つまらないさ。』

『清水さんは、お姉さまと二人で、残りたいのだらう？』

すばりと言はれて、清水は顔を赧くすると、すこし狼狽へたが、

『べつに、さういふわけぢやないけれども……』

と、辯解した。

『それなら、一人で残るか、いつしよに来るか、早く、決めたらいいぢやないの。船が出てしまふよ。』

『欣一君に逢つたら、敵はないな。——一人で残るくらゐなら、もちろん、僕だつて、いつしよに行くさ。』

『それなら、早く、さう決めればいいのに。』

欣一は笑つた。

三

湖尻の船着場は、簡単な待合所と、二三軒の駄菓子など賣つてゐる店があるきりで、べつに見るべきものもなく。

『それ見たまへ。わざ／＼来たつて、つまらないだらう。だから僕が、止したはうがいいと、あれほど言つたのに、皆な強情張るからさ。』

遊覧船から上ると、清水は、それ見たことかと言はぬばかりの調子だつた。でも、欣一は、

『僕たちは、こゝに来たことを、ちつとも後悔なんかしてゐないもの。——見るものなんかなくたつて、失望はしないさ。そんなことは、初めから、ちゃんと知つてゐたんだもの。』

と、言つた。

『そんな負け惜しみを言つてるんだね。山と、木と、草とばかりぢやないか。こんなところに来て見たつて、面白いことなんか、一つもないよ。』

『それは、銀座や、浅草に行つたのとは、ちがふもの。』

『だから、箱根の山なんか、どこに行つたつて、同じことさ。』

『僕は、遊覧船に乗つたり、歩いたりするのが、楽しいんぢやないか。』

『何んとか、言つてるんだね。』

清水が冷かすと、

『本當だよ。』

と、欣一は眞面目だつた。

遊覧船が出るまでには、一時間半待たなければならぬ。

その間、皆なは揃つて、その邊を歩いて見ることにした。

『この道を真直ぐに行くと、仙石原の方に出るんです。』

清水は、美津江と肩を並べて歩きながら、そんなことを説明した。

『宮内さん。あそこに、あんなきれいな花が咲いてゐますよ。』

欣一は、そこにも、こゝにも、名の知れないやうな可憐な花が咲いてゐるのを見ては、一々眼を留めた。

『欣一君の相手になつて、山を歩くのは、もう懲り／＼した。いくらでも花を欲しがつて、きりが無いんだもの。美津江さん、僕たちは、先に行きませう。』

いつの間にか、清水と美津江とは、肩を並べるやうにして、二丁ばかりも、先になつてしまつた。

それは、清水の思ふつぼでもあつた。

四邊には、人影も見えなかつた。いろ／＼な雑木が茂つて、小暗い林を縫ふやうにして、一筋の道がつゞいてゐる。林の下には、何といふ名か、いろ／＼の草花が咲きみだれてゐるし、遠くや、近くで、可愛らしい小鳥の囀つてゐる美しい聲が、たのしさうに聞えてゐた。

そのほかには、何んの物音も聞えない。静寂そのものゝやうに、ひっそりした中に、二人の息づかひや、心臓の鼓動までが、ハッキリ聞き取れるやうな気がした。

『しづかですな。』

しばらく、物を言はずに歩いてゐてから、清水がポツリと言つた。

『えゝ。』

と、美津江は言つたが、清水とたつた二人きりのことが、急に氣になつて、不安な氣がして来た。

『欣一や、宮内さんたちは、どうしたのでせう？』

立ち留つて、振り返つて見たけれども、二人の姿など見えなかつた。暗い林の下に、細い道が一筋、つゞいてるだけだつた。

男の情熱

『氣になりますか？』

と言つて清水は、ニヤ／＼微笑しながら、美津江の美しい横顔を、じつと覗き込むやうにし

た。

『わたし、ちよつと、引つかへして見て來ますわ。』

言ふなり美津江は、すたくと、元來た道を急ぎ足に、二三歩あるいたと思ふと、清水は慌てて、

『いいちやありませんか。欣一君には、宮内君が附いてゐるんですもの。』
と言ひながら、追つかけて來て、ムズと美津江の手を捕へた。

『でも……』

美津江は、今は欣一のこと氣になるといふよりも、こんな人通りもない林の中の小道に、清水と二人きりでゐるといふことが、氣味がわるかつた。

『わざと引つ返して見なくたつて、ぼつと歩いて行くうちには、きつと追ひ附いて來ますよ。』

清水は、美津江の手を取つたまゝ、離さうとはしなかつた。

『道は一筋ですから、ほかに、どこへも行くはずはありませんから。』

と言ひながら、清水は美津江を引つ立てるやうにして、ずん／＼先に歩いた。——斯うしてゐる間にも、今にも欣一と愾之助とが、追ひ附いて來さうな氣がして、氣が氣ではなかつた。

『ぢや、こゝで暫らく、待つてゐて見ませうか。』

と言つて美津江は、掴まれてゐる手首を、そつと振り放した。

『さうですな……ですが、もう少し先のはうまで、そろ／＼歩いて行つてもいいちやありませんか。』

『ええ。』

べつに拒むべき理由もなかつたし、また、たつた二人きりだからといつても、清水も教養ある青年紳士として、あまり亂暴な眞似をするとも思へなかつた。たゞ、二人だけで、こんな環境にゐると、何か面倒くさいことでも言ひ出されさうな氣がして、考へて見ると、それが煩しい氣がするのであつた。——美津江としては、なるべくそんな機會は、作らないやうにしたいと思つた。

『僕には、どうも……美津江さんの態度が、氣になるんですが。』

二人は無言のまゝ、また一二丁ばかり歩いたところで、清水が、突然、そんなことを言ひ出した。

『あら、どうして？』

と言つて美津江は、つい立ちどまつてしまつた。

「美津江さんは、まさか、あの男を……あんな田舎出の家庭教師なんか愛してゐるのではないでせう。」
と言ふ聲は、かすかに慄へを帯びてゐた。——清水も美津江と同じやうに、立ちどまつてゐた。

「まあ。」

美津江は、ほのかに顔が赧らむのを、自分で抑へることが出来なかつた。

「愛してゐるんですか？」

清水は、冷静でゐようとしながら、呼吸を弾ませてつい躍起にならずにはゐられなかつた。

「……………」

美津江は黙つて、たゞ、微笑んでゐるだけだつた。

「やつぱり……愛してゐるんですな！」

清水は、絶望的に言つたかと思ふと、かなしさうに頭を掉つた。

「わたし、そんなことを、今こゝで、あなたにご返事しなければならぬ義務も、責任もありませんわ。」

美津江は、冷かに言つた。

「義務や、責任ですつて？」

「ええ。」

「美津江さん。」

「え？」

「あなたには、僕のこの氣持が、分らないのですか？」

と言つて清水は、切なさうに溜息を吐くと、俳優のやうな、キザな身ぶりをして左の手で、そつと自分の胸を抑へ、キラ／＼かゞやく眼をして、冷やかな、美しい美津江の顔を見入つた。

二人とも、道端の青草の上に、腰を降ろしてゐた。

「あなたの氣持といふのは、どんな氣持でせう。」

美津江は冷静に、ほのかな微笑すら含んでゐた。

「ずるぶん慘酷ですな。」

「誰が？」

「あなたが。」

「まあ。」

美津江は、美しい眼を、大きく見張つて、

『わたしが、惨酷でせうか。』

と、繰返した。

『惨酷です！ 惨酷です！ 僕にたいしては、とても惨酷です。』

『どうして？』

『何もかも、わかつてゐるくせに。』

と言つて清水は、怨めしさうに溜息を吐いたが、

『美津江さんは、僕の言ふことなんか、眞面目になつて取り上げては下さらないのだ。いつでもとぼけたり、白ばつくれたり、はぐらかしたり……』

『まあ。』と、美津江は笑つたが、

『ちや、わたし、餘つぽどわるい女なんだわね。』

と、言つた。

『そら、そのとほり、僕がこれほど一生懸命になつて言つてゐることを、すぐに、はぐらかしてしまふぢやありませんか。』

『そんなに、わたしがわるい女なら、どうぞ、これからはわたしなんか、相手にしないで頂戴。』

と言つたかと思ふと、美津江はつと立ち上つてゐた。

『待つて下さい。』

と、清水は慌てゝ、美津江を抑へるやうな手付きをして、

『怒つたのですか？』と、聞いた。

『いゝえ。』

『美津江さん。どうぞ僕に、一言だけ言はせて下さい。』

『……………』

美津江は、へさつきから、自分一人で、勝手に喋つてゐながら（と思つて、心ではをかしかつたが、笑ふのもわるい氣がしたので、黙つてゐた。

『僕は……美津江さん。あなたを、愛してゐるのです。』

清水は、赤い顔をして、呼吸を弾ませて、一生懸命に言つた。

『……………』

美津江は、黙つてゐた。

『美津江さん。どうぞ、僕と結婚してくれませんか。』

『わたし、まだ、結婚なんて、考へたこともないの。』

『あなたは、あの男と……宮内君と、結婚するんですか。』
『まあ。』

美津江は、かどやいた眼を見張つて、燃えるやうに眞赤になつた。

『僕は……僕は、どんなことがあつても！』

息を弾ませて叫んだかと思ふと、氣狂ひのやうになつて、美津江の身體を抱きすくめようとして、キラ／＼と眼をかどやかにして、獸のやうに飛びかゝつて來た。

『何をなさるの！』

言つたかと思ふと美津江は、危いところで、ひらりと身を交した。

嵐のやうに物狂ほしい男の情熱の爆發が、恐ろしくなつて來た美津江は、何をされるかわから

ず、不安になつて、

(欣一さん、宮内さん、どうしたの？ 早く来てよ！)

と、必死になつて、心で祈りながら、清水に相對してゐた。

三

『あそこにも、きれいな花が……あら、こゝにも。』

欣一は、相變らず花を取るのに夢中になつて、叢の中を、あつちやつちと、慎之助を引つ

張り廻してゐた。——いつの間にか二人とも、美津江や清水と離れてしまつたことなど、氣になくなくなつてゐた。どうせ今離れ／＼になつても、遊覧船が出る時間になれば、湖尻の發着所で、いつしよになるのは分つてゐた。

『宮内さん。海岸よりも、山のはうがいいね。——こんなに澤山、どこに行つても花があるんですもの。』

花の好きな欣一は、上機嫌だつた。

そのうち、欣一は突然、

『あつ、宮内さん。あそこで、畫を描いてゐるよ。』と、叫んだ。

見ると、湖尻の汀近くに畫架を据ゑて、熱心に風景を寫生してゐる一人の畫家の姿が、はるかに見えた。

『なるほど。この邊の景色を、寫生してゐるんですね。』

慎之助は、自分も畫を描くことは好きだつたし、それに畫の上手だつた美登里のことや、青木先生のことなどを思ひ出して、何か感慨を催ほして、しばらく、そこに佇ずんで見てゐた。

『宮内さん。もつと傍まで行つて、見ませうよ。』

やがて欣一が、さう言つてせがみ出した。

『さうですな。』

そこまでは、二丁ばかりの距離があるし、慎之助は少しためらつてゐた。

『どんな畫を描いてゐるか……僕、見たいな。』

欣一も、畫を描くのは好きで、しかも上手だつた。

『ちや、行つて見ませう。』

慎之助は、欣一に誘はれて、畫家が寫生してゐるところまで、つい行つて見る氣になつた。

——あゝ、そのことが、青木とめぐり逢ひ、再び美登里と相見る因縁にならうとは！
神ならぬ身の慎之助は、その時、夢にも氣が附くはずはなかつた。

別莊の客

—

『宮内さん。』

欣一は振り返つて呼びかけると、また、カンヴァスの上に眼を移して、じつと見入りながら、

『やつぱり、うまいなあ。』

と、こゝろから感嘆して、かすかにさゝやくと、溜息を吐いた。

カンヴァスの上には、近景に湖水と、山とを描き、遠くに富士山を見せた、あり觸れた景色が描かれてゐるのであつたが、構圖がナカ／＼奇抜だつた。それに色調といひ、ブラツシのタツチといひ、どこか非凡な感じが出てゐた。

『……………』

自分でも畫ごころのある慎之助には、その未完成ではあるけれども、八分通りまで描き上げられてゐる畫の巧さは、ひしひしと胸に迫るやうに分つた。——欣一の言葉には、特に返事をしなかつたけれども、うなづいてゐた。

畫家は、向ふを向いて、景色を睨んでは、しきりにブラツシを、カンヴァスの上に動かしてゐた。後に二人が近づいて來たことも、また、自分の描いてゐる畫に感心して、何かさゝやいてゐることに、ちつとも氣が附かない様子だつた。

慎之助は、その後、姿に、どこか見覚えがあるやうな氣がしたけれども、誰だか分らなかつた。まさか、それが青木先生であらうとは、眞正面に顔を見合わせるまでは、氣が附くはずがなかつた。

『僕も、畫が描きたいな。』

氣が多くて、我儘なところのある欣一は、突然言ひ出した。

『しかし、仕方がないさ。畫を描く道具を、持つて来てゐないんだもの。』
慎之助としては、いつまでも見てゐて、欣一に駄々をこねられると困ると思つた。それには、こゝから早く、引きあげるよりほかはない。

『もう行かうぢやないか？ お姉さまたちが心配して、探してゐるとわるいから。』
と、言つた。

『僕は、もつと見てゐたいな。』

と言つて、欣一は鼻を鳴らした。

『見てゐるだけならいいけれども、こんなところで、自分も畫を描きたいなどと言ひ出しちや、困るよ。』

『うん、分つてゐるよ。』

と、欣一はうなづいて、

『見てゐるだけだから、もつと、こゝにゐてね。』

と、機嫌を取るやうに言つた。

慎之助は、可憐らしくなつて、

『ぢや、邪魔にならないやうに、もう暫らく、見てゐよう。』

と、小聲でさゝやいた。

『僕、邪魔しないやうにするから。』

欣一は、素直に言つた。

『坊ちゃん。畫を描くのが好き？』

いくら聲をひそめるやうにして、さゝやいてゐても、二人の話し聲が、聞えたのだらう。畫家はさう言つて、ちよつと畫筆を動かしてゐた手を休めると、欣一のはうを振り返つて、ニッコリした。

『僕、好きです。』

欣一は、卒直だつた。

『ぢや、小さなカンブラスがあるし、繪具も、畫筆もあるから、使つたつて、いいですよ。』

『うれしいな。』

欣一が、躍り上らんばかりにして、手をたゝいた時、ちやうど畫家の微笑した顔が、問ひかけるやうな眼ざしをして、慎之助のはうを振り向いた。

『あつ。』

『あつ。』

まともに顔を見合せると同時に、慎之助も畫家も、二人の唇から、同時に驚きのさけび聲が洩れた。

『青木先生ちやありませんか。』

うれしいやら、びつくりしたやらで、慎之助が息を弾まして言へば、青木も感慨無量だった。

『宮内君。』

と、呼んだきり、しばらくは後の言葉がつゞかなかつた。

『ちつとも、知りませんでした。全く意外です。』

慎之助が言ふと、青木は立ち上つて、彼の手を取つて、

『ひよつとしたら、東京では逢へるかも知れないと思つて、電車に乗つても、道を歩く時でも、それとなく氣を付けてゐたけれども、まさか、こんなところで、こんな工合にして逢はうとは、考へても見なかつたものだから。』

と、感激に臉をうるませて、聲も、かすかに慄へて、慎之助の手を握つてゐる手に、思はず力が入つた。

『僕は、また先生が、上京してゐらつしやるのか、どうかといふことも、ハッキリ知らなかつ

たものですから。』

『僕が上京して來たのは、君より少し後だったものな。』

『上京なされるために、學校のはうもお止めになつたことは、僕も、よく知つてゐたのですが。』

『さう〜。君が東京に出て來たのは、美登里さんが、女學校を卒業すると、間もなくだつたな。』

『はあ。』

とは言つたけれども慎之助は、何氣なく青木先生の唇から洩れた美登里の名を聞くと、さつと顔色を變へて、力なくうな垂れてしまつた。

それで青木先生も、急にハツとして氣が附いたやうに、

『何しろ、こんなところで偶然逢ふなんて、まつたく夢のやうな氣がする。眞に奇遇といふべきだ。』

と、言葉を變へて、

『いろ〜、その後のことで話もあるんだが……どう？　これから僕に宿に行かないか。』

と、言つた。

『折角ですが……』

愼之助が、言ひにくさうにして、もぢくしてゐると、

「差支がある？」

と青木が聞いた。

「はあ。」

「この坊ちゃんのほかに、誰か連がある？」

「はあ。」

「だが、折角、斯うして逢つたのに、このまゝ別れてしまふのは、残念だな。イヤ、このまゝでは、別れられない。」

「宮内さん。この畫を描く人を、知つてゐるの？」

それまで、好奇心に眼を見張るやうにして、二人の顔ばかり、じろく見比べてゐた欣一が、口を挟んだ。

「故郷のはうで、ずつと前から、知つてゐるんです。」

と、愼之助は答へた。

「ちや、葉山の別荘に、いつしよに来て頂けば、いいぢやないの。」

「さうですな。」

愼之助が、ためらつてゐると、欣一は更に、

「ね、さうなさいよ。——さうすれば、僕は、どんなにうれしいか、知れないんだけど。と、言つた。」

「……………」

しかし、愼之助としては、いくら欣一が、すゝめてくれたとしても、すぐに、さうするわけには、いかなかつた。黙つて、まだ躊躇してゐた。

「ねえ、さうすればいいぢやないの。僕、お姉さんに、さう言ふから。」

と言つてから、今度は青木に向つて、懐かしさうに、

「いつしよに葉山の別荘に、来て下すつてもいいでせう。」

と、言つた。

「さうですな。——僕は、どちらでも構ひませんが。」

青木は、品のいい、人懐こい少年の人柄や、態度に、初めから好感を持たずにはゐられなかつた。

「この坊ちゃんは？」

と、青木はニコ／＼した笑顔で、欣一を見ながら、愼之助に聞いた。

『柳田伯爵家の坊ちゃんです。欣一君といふんです。』
 慎之助が答へると、青木は更に不思議さうにして、

『それだのに君は、どうして、知つてゐるの？』

と、聞いた。

『それには、一口では話せないやうな、譯があるんです。』

『ふむ。』

『それで僕は、つまり欣一君の家庭教師をしてゐるんです。』

『なるほど。さうか。』

青木は、初めて合點が行つたやうに、うなづいた。

ちやうど、その時だつた。あたりの叢を掻きわけけるやうにして、思ひもかけぬ方角から、美津江が現はれると、

『まあ、こんなところにゐたのね。だから分らないはすだわ。』

と、言つた。

『あつち、こつちと、すゐぶん方々を探したのよ。』

さう言ふ美津江の後には、清水もつゞいてゐた。

『ねえ、お姉さま。青木さんもいつしよに、これから葉山の別荘に行つたつて、いいでせう。』

欣一は、つか／＼と美津江の傍まで進むと、行きなり言つた。

『青木さんて？』

美津江は、そこに立つてゐる見知らぬ畫家のはうを、チラと見た。

『この方が、青木さんです。畫が、とても上手なんです。宮内さんとは、古くからの知合ひの方ですつて。』

『さう。』

そこで慎之助は、黙つてゐるわけにいかないで、美津江にも、清水にも、改めて青木を紹介した。

若い美津江は、慎之助の以前からの知り合ひだと聞くだけでも、青木に對して、何か親しみを感ぜずにはゐられなかつた。それに、いかにも畫家らしい、さつぱりした青木の態度にたいしても、好感を持たずにはゐられなかつた。

『宮内さんには、欣一がとてご厄介になつてゐますの。』

美津江は、慎之助のはうを、チラと振り返つてから、ニツコリして、

『ぢや、お差支ありませんでしたら、是非、いつしよに葉山にいらして下さいませ。ね、宮内さんからも、どうぞお誘ひしてよ。』

と、二人をチラ／＼と見比べながら、いかにも愛相よく言った。

『イヤ、宮内君からすゝめられるまでもなく、それでは、お言葉に甘えて、早速、うかどふことにしませう。』

青木としては、まだ獨身だし、東京ではアパート往ひの氣樂な身の上であり、沉んや、こゝでは晝を描くための旅先のことで、誰に相談する必要もなければ、誰に遠慮することもなかつた。

『まあ、うれしい。』

美津江は、こゝろから喜んだけれども、獨り不服さうに、素つ氣なく顔を背けてゐるのは、清水だつた。

黒い人影

サロンでは、別荘に於ける夏の夜の遊びに想應しいやうな、いろ／＼な遊びが始つてゐて、夜の更けるのも、知らないやうな様子だつた。

シャンデリヤの美しい光りが、華やかに廣い室内いつばいを照らし、開け放つた窓や、ヴェランダから、庭の植込や、芝生の上になで、明るく流れてゐる。若い男女の嬌聲や、賑やかなお喋りの聲などが、ちやうど明るい照明の光りと同じやうに、室内いつばいにあふれ、そして、庭のはうにまでも流れてゆく。

柳田家の別荘のサロンである。そこには勿論、美津江もゐれば、清水も來てゐるし、欣一も混つてゐた。

『ちよつと——』

青木は、ほかの人々の愉快な遊びを邪魔せぬやうに、小聲で慎之助を誘ふと、誰にも氣づかれぬやうに、そつとヴェランダから庭に降りた。

『どこへ行くんですか？』

と、慎之助が聞くと、青木は聲をひそめるやうにして、

『二人だけで、是非、話をしたいことがあるんだ。』

と、言った。

『さうですか。それでは、海岸に出て見ませう。』

と言つて慎之助は、先に立つて、案内知つた庭木戸から濱へと出て行つた。

明るい月夜だった。

海岸に出て見ると、月の光りの明るさが、一際目立つた。高い空には、チラ／＼と星の光りが見え、蒼白い月の光りが、海にも、濱にも、いつばいにあふれるやうに流れてゐた。二人は渚づたひに、しばらく黙々として歩いて、ご用邸裏の海岸から、長者ヶ岬の近くのはうまで行つた。

が、二人が別荘のサロンを抜け出した時から、どこまでもどこまでも執拗に、見えかくれに、二人の後をつけて来る一人の黒い人影があることには、青木も、慎之助も、夢にも気が附かなかつた。

『二人だけで、僕にお話があるといふのは、どんなことですか。』

どこまで歩いて、青木が黙々として、何も言ひ出さないで、たうとう慎之助は立ちどまつて、振り向くと、自分から聞いた。

『さうだな……では、あそこで話さうか。』

青木も立ちどまつて、ちよつと四邊を見まはしたが、その濱に、二つ三つの岩が、黒々と凸凹してゐるのを見ると、先に立つて、つか／＼と進んだ。

慎之助も、その後に従つたが、さつきから二人の後をつけてゐた黒い人影も、一つの岩かげに

忍び寄つてゆくと、じつと息を殺すやうにして、話し聲に耳をかたむけた。二人との間は、わづかに四五尺くらゐしか離れてゐない。

でも、二人とも、やつぱり気が附かなかつた。

二

『僕は、君と、美登里さんとの間のことは、いくらか知つてゐるつもりなだけども……』
やがて青木は、岩かげの乾いた砂の上に、うづくまるやうにして、言ひ出しにくさうに、口を切つた。

『美登里さんから……お聞きになつたのでせう。』

しばらく間をおいてから慎之助は、美登里のことを言はれて、いかにも昂ぶつてくる感情を、やうやく抑へるやうにして、口をきいた。

でも、その聲が、かすかに慄へてゐるのも、呼吸が並々ならず喘ぐやうになつてきたのもわかつたし、切なさうに顔が歪んで、唇のまはりの筋肉が、こまかく不随意に痙攣してゐるのも、明るい月の光りで、ほのかに見えた。

『イヤ、美登里さんから、べつに聞いたわけではないが。』

と、青木はあわてゝ打ち消すやうに、頭を掉つた。

『ぢや、どうして、知つてゐらつしやるのでせう？』

慎之助は、意地わるいと思はれるやうに、追究した。

『それは、わかるさ。』

青木は、やうやく冷靜を取返すと、さう言つた。

『そんなことは、僕にとつては、要するにどうでもいいことですが……それよりも、二人きりで話があるといふのは、美登里さんのことでせうか。』

『さうだ。僕は、君に、美登里さんのことについて、どうしても話さなければならぬことがあるんだ。』

『ですが、僕は、美登里さんのことなら、聞きたくないんです。——また、聞く必要もないのです。』

慎之助は、不斷のやさしさに返り、落着きを取りもどしたが、でも、キツパリ言つた。

『それは、どういふ意味かね？ 二人は、あんなに愛し合つて、將來の約束もし、いつしよに上京しようとしてゐた仲ぢやないか。』

青木は、キツとなると、詰るやうな調子で言つた。

『なるほど、以前はその通りでした。でも、それは昔の夢です！ 今では、何でもありません。』

言葉そのものゝ意味は、非常に冷たかつたけれども、そのひびきには、無限の悲しみをふくみ、やる方のない痛憤の情を湛へてゐることが分つた。

『昔の夢だつて？』

『はあ。』

『しかし、美登里さんのほうでは、どんなにか今でも、君のことを思つてゐるか、知れないのだぜ。』

『そんなはずはありません！』

『君は、何も知らないのだ。』

『イヤ、知つてゐます。僕は裏切られたのだといふことを、よく知つてゐます！ 恐らくそのことは、誰よりも僕自身が、一番よく知つてゐるでせう。そして、一生涯忘れないでせう。』

『美登里さんが、君を裏切つたなんて！ 若し君が、そんな風に思つてゐるのだとしたら、それは君の間違ひだ。まったく誤解してゐるのだ。』

『いゝえ、誤解ではありません！ 僕は、事實に基づいて言つてゐるのですから、誤解や、間違をしようにも、するはずがないぢやありませんか。』

慎之助は、飽くまで強情で、頑固だつた。——青木が、美登里のために、いくら辯解しても、

辯解すればするほど、餘計、意固地になるのではないかと、青木には思はれた。

三

『では、君に聞くがね、美登里さんは、今、どうしてゐるか、君は、ハッキリ知つてゐるのかね。』

青木は、しばらく考へてゐてから、しづかに聞いた。

『今、どうしてゐようと、僕には何の關係もない人のことを、僕が、知つてゐるはずもなし、また、知りたいと思ひませんから……』

慎之助は、かなしさうな聲を慄はせて、口縮つた。

『それ見たまへ。やつぱり君は、何も知らないぢやないか。』

と言つて青木は、やさしい微笑を口元に浮べた。

『利一郎君と、結婚したといふことを、ほのかに聞きましたから、きつと睦じい新家庭を作つてゐるのでせう。』

慎之助は忌ま／＼しさうに言つたが、急に怒つたやうに、

『ですが青木先生は、何だつて僕の口から、こんなことまで言はせるのです？ どうして意地わるく、僕の傷口を突ツつかなければならないのです？』

と、喰つてかゝつた。

『それは、美登里さんが、あんまり氣の毒だから。そして、美登里さんは、決して君を裏切つたのではなく、今でも多分——多分と言ふよりほかはないのが残念だが、多分君を愛しつゞけてゐるに違ひないと思ふからだ。』

『えつ。では先生は、美登里さんが、今どうしてゐるか、知つてゐるんですか？ 尤も、そんなことは、僕に取つては、どうでもいふことですが。』

『僕も知らないね。』

『知らないのですか？』

『だから、多分と言ふよりほかはないのさ。』

『それなら先生も、多分にも何にも、美登里さんが、今でも僕を愛してゐるなどといふ資格はないはずではありませんか。』

『しかし、その資格は、君よりも僕のはうに、あるやうだな。』

と言つて、青木は微笑した。

『どうしてですか？』

『君は、美登里さんと利一郎君とが、結婚したことまでしか知らないだらう。しかし僕は、美登

里さんが、新婚旅行の途中から、逃げ出してしまったことまで、ちゃんと知ってるからな。』
『えつーでは、美登里さんは結婚してから、逃げ出したのですか。』
『さうだよ。』

と言つて青木は、うなづいた。

『では、それから美登里さんは、どうしたのです？』

『行衛不明だよ。』

『えつ。』

『君の後を追つて、上京したのだといふ見込みでね、利一郎君もすぐに東京に出て来て、君と美登里さんの行衛を、血眼になつて探してゐるよ。』

『しかし僕は、美登里さんの行衛なんか知りません。』

『それは、僕も信じてゐるさ。だが、利一郎君は、てつきり君と美登里さんと、いつしよにゐるに違ひないと、さう決めてかゝつてゐるからね。』

『冤罪です。』

『利一郎君ばかりではない。美登里さんの両親たちも、君の方の親類の人々も、皆なさう決め込んでゐるさうだよ。』

『僕は、知りません。』

慎之助は、呻くやうに言つた。

『知らないはずだね。——君には、いつの間にか、あんな美しい愛人が出来てゐるのだもの。』
『美しい愛人ですつて？』

『さうさ。』

『それは、誰のことですか？』

慎之助は呆れて、眼を丸くした。

『伯爵家の令嬢さ。』

『えつ、美津江さんのことですか。』

『もちろん。それよりほかには、君の周囲には、伯爵家の令嬢なんて、一人もゐないぢやないか。』

『違ひます！』

突然、慎之助は叫んだ。

『何が？』

『美津江さんが、僕の愛人だなんて！ それは違ひます！ なるほど美津江さんは、僕に取つて』

は恩人です。でも、決して愛人ではありません！」

慎之助は、佛然として色を變へて、必死になつて打ち消した。

「しかし、令嬢のはうでは、たしかに君を愛してゐるね。」

「僕は……僕は、知りません！ そんなはずはありません。」

「まあ、いいさ。そんなにムキにならなくても。」

と、青木は微笑を浮かべながら、やさしく言つたが、

「しかし、氣を附けたはうがいいね。——君のために、美登里さんが、行衛不明になつてゐることを考へ、すこしは美登里さんを、氣の毒だと思つたらね。」

と、訓誡を加へた。

「ですが僕は、美登里さんなんかにたいしては、何の責任もありませんから！ 美登里さんが行衛不明にならうと、どうならうと、そんなことは、僕の知つたことぢやありませんから。」

「君は、心からさう言ふのか？」

「もちろんです。」

「そんなことを言つて、君の良心は痛まないのか？」

「疚しいことがない以上、良心が痛むはすがありません。」

「冷血漢！」

と、青木が罵ると、慎之助はキツとなつて、青木の顔を見返したが、

「僕が、冷血漢でせうか？」

と、斯う反問した時、慎之助の双眼からは、見る／＼涙があふれた。

毒蜘蛛の網

一

「僕が、これほど言つても、まだ信じないのですか？」

清水は、じり／＼してゐたが、美津江は、平然として、

「信じないわ。」

と、言つた。

「あなたのおつしやることなど、一々本氣になつて、取り上げてゐたら、限りがないのですも

の。」

面と向つて、ツケ／＼と言はれても、しかし清水は怒れなかつた。これが惚れた弱味といふのだらう。どんな棘のある言葉でも、侮辱に満ちた言葉でも、それが美津江の唇から洩れるのだ

と、清水は、どうしても怒れなかつた。——怒らうとしても、怒れないのであつた。

『これは、すこし酷いすな。——僕は、折角、美津江さんのためを思つて言つてゐるのに。』

清水は、何と言はれてもニヤ／＼して、頭を掻いてゐた。

『ですから、わたしのためなんか思つて下さらなくてもいいの。』

『ます／＼酷い。』

『さうかしら。』

『僕は、苦心をして、わざ／＼二人の後をつけて、すつかり聞き出して来て上げたんぢやありませんか。』

『まあ、おせつかひね。』

『おせつかひだけぢや出来ないことだと思ひますが。』

『さう。』

『皆な、あなたのことを思へばこそですぜ。——つまり、愛すればこそといふヤツぢやありませんか。』

『でもね、清水さん。』

『はあ。』

『わたしは、そんな卑怯なことをする人は、大嫌ひなの。』

『卑怯なことつて？』

『探偵のやうに、人の後なんかつけて、こつそり人の話を、盗み聞きすることですわ。』

『これは／＼。』

と、清水はニヤ／＼笑つて、また頭を掻いたが、

『相手が、泥坊のやうな真似をする人間なら、こつちだつて勢ひ、探偵のやうな真似もしなくてはならないことになるぢやありませんか。』

『宮内さんが、いつ泥坊のやうな真似をして？』

『泥坊のやうな真似をしなくても、色魔ですからな。』

『まあ。』

美津江は、あまりの言葉に呆れると同時に、腹を立てた。

『たしかに、色魔ですよ。美津江さんは、色魔に騙されてゐるのです。』

『止してよ。』

『ですが、僕としては、忠告せずにはゐられませんからな。』

『大きなお世話さまだわ。色魔だつて何だつて、わたしは宮内さんを好きだから、それでいい』

人の好い清水だつたが、さうまでハッキリ言はれると、さすがにムツと、顔色を變へずにはゐられなかつた。

『本當ですか？』

自分でも、わかり切つてゐるくせに、念を押した。

『え、本當よ。』

美津江は、だん／＼緊張した表情になつて、キツパリ言つた。

『では、やつぱり宮内君と、結婚するのでせう？』

清水の顔色は眞蒼になつて、その聲ばかりではなく、身體まで、かすかに、ブル／＼と慄へてゐた。

『わたし、本當のことを言ひますけれども……』

美津江も、いつの間にか眞剣になつて、美しい二つの膺がキラ／＼とかゞやき、臉から頬のあたりが、ほんのとり賑らんで來た。呼吸が迫つて、すこし息ぐるしくなつたやうに、ちよつと口籠つたが、

『宮内さんを愛してゐますの。——身も、こゝろも捧げて、愛してゐますの。愛してゐるばかりではなく、あの方の人柄を、尊敬してゐますわ。』
と、言つた。

『それで？』

清水は、打ちのめされたやうに、歪んだ表情をして、くるしさに肩を喘がせてゐたが、しばらくの間、白け切つたやうな沈黙がつゞいてから、やうやく促がした。

『ですから、わたしのほうでは、出来るものなら宮内さんと、結婚したいと思つてゐますの。』

『それで二人は、もう約束をしてしまつたのですか？』

清水が急ぎ込んで聞くと、美津江は落着いて、

『いゝえ。』

と、かなしさうに眼にいつばい涙を溜めて、頭を掉つた。

『あの方は、きつと、わたしなんか、愛しては下さらないのよ。』

絶望的に、でも靜かに言つた時、涙が二三滴、彼女の長い睫毛をつたうて、ハラ／＼とこぼれた。

『色魔ですからな。』

清水は、だん／＼生氣を取り返して來たと思つたら、今度は勝ちほこつたやうに言つた。

『宮内さんは、色魔ぢやないわ。』

『しかし、故郷でも一人の女を騙して、東京まで逃げ出して來てゐるといふくらゐですからな。』

『あの方が色魔なら、わたしを誘惑なさるはずだわ。』

『誘惑してゐるぢやありませんか。』

『いゝえ、違ひますわ。わたしが、あの方を愛してゐるのよ。でも、あの方は、わたしを愛しては下らないの。愛したやうなふりもしては下らないわ。』

と言つて、寂しさうに微笑すると、かすかに溜息を吐いた。

『しかし、それが一つの術かも知れませんからな。』

『どうして？』

『つまり、さういふ冷淡な態度を装ふことに依つて、あなたを惹きつけるといふ術なんです。』

『まあ。』

美津江は、あまり穿ちすぎた清水の解釋に呆れた。

『美津江さんは、僕のやうに、自分のはうからヤイ／＼と愛を求める男は反撥して、冷淡にしてゐる男のはうを、かへつて情熱を傾けて愛する性格らしい。——つまり宮内君は、さういふ美津

江さんの性格を、初めから洞察してゐて、わざと冷淡を装つてゐるのでせう。』

『そんな考へ方つてないわ。ずるぶん酷いと思ふわ。』

美津江は、眉をひそめた。

『つまり美津江さんは、毒蜘蛛の張つてゐる網に、うま／＼と引つか／＼つたといふわけですな。』

『あら、酷いわ！ わたし、あなたとは、もう話をしませんから。』

と、言ひ捨て、美津江は、榻からつと立つてしまつた。

三

相模灘を一眼に見晴らす高臺の阿亭で、二人は相對してゐたのである。

『美津江さん——』

あわて、清水が呼び留める聲を、美津江は後に聞き捨て、さつさと高臺から降りてしまつた。

自分の部屋に歸つても、氣が落着かない。やりかけの佐賀錦を、すこし織つて見たが、すぐに臺から離れてしまつた。雑誌を読みかけたが、それも落着いて讀めなかつたし、ピアノをたたいて見ても、やつぱり、十分とはつゞかなかつた。

美津江は、たうとう思ひ切つて、二階に上つて行くと、何度かドアの外でためらつた後、おづ

おづとノックした。

『わたし、あなたに、ちよつと伺ひたいことがあるの。』

美津江は、デスクに向つて、勉強に熱中してゐる慎之助の傍まですすむと、低い聲で言つた。
「はあ。」

慎之助が、打つきらぼうの態度で迎へたので、美津江は取りつき場もないやうな氣持で、ちよつとの間、そこに立ちすくんでゐたが、やがて、

『掛けても、いい？』

と、かすかな笑顔で聞いて、そのイスに着くと、

『あなたは、愛し合つてゐられた方があつたのだつて、ほんとう？』
と、聞いた。

『そんなことをお聞きになつて、どうするんです？』

慎之助は、ニコリともせず、苦が苦がしさうに答へた。

『その方は、一度結婚なすつたのに、あなたの後を慕つて、逃げ出して、上京なすつたんですつてね。』

『そんなことは、僕の知つたことぢやありませんから。』

『それで、わたしの伺ひたいことは、その方のことを、あなたは、今はどう思つてゐらつしやるかといふことなの。つまり、今でも、あなたは、その方を愛してゐらつしやるか、どうかといふことなの。』

『そんなことは、僕からお答へするまでもなく、わかり切つたことだと思ひますが……』

『と、おつしやる？』

『男として、一度自分を裏切つた女を、いつまでも愛しつゞけてゐるなんて、そんなことが出来るはずがありません。』

『本當？』

『ほかの人の場合は、どうか知りませんが、すくなくも僕は、一度自分を裏切つた女なんか、憎みこそすれ、愛しつゞけるなんてことは出来ません。』

『それでは、若し、その方に、今度お逢ひになつたら？』

『逢ふ必要もなし、恐らく逢ふこともないでせう。——若し逢つたとしても、路傍の人以外の何者でもないです。』

『お言葉のとほりに、信じてもいいのかしら？』

とは言つたが、美津江の顔は、だん／＼晴れ／＼とかがやいて來た。

『それは、あなたのお心任せですが……しかし、僕としては、眞實のことを言つてゐるのですか』

『さう！』

美津江はニツコリしてうなづく、

『わたし、信じるわ。——わたし、うれしいの。』
と言つて、幸福さうに溜息を吐き、眼をかゞやかした。

奇蹟

九月中旬だといふのに、周囲を取りかこんでゐる高い山々には、既に秋の色が深かつた。常緑木以外の木々は、美しく黄葉し、紅葉して、見る限り絢爛たる錦を繰りひろげたやう。

夜々の霜は繁く、朝夕は冷氣のために吐く息も凍つて、眼の前に、白い湯気が立つやうに見える。

美登里は、S——の山奥の炭焼小屋の中で、つい足かけ三月といふ、かなり長い月日を過ごしてしまつたが、その間、病床に臥する悲しい身を、どうすることも出来なかつたのである。

暗い、馴れない夜の山道に足を踏みすべらして、急勾配の谷底にころげ落ちて、そのまま氣を失ひ、しばらくして意識を回復した時には、動くにも動くことが出来ず、起き上らうとしても、起き上ることも出来なかつた。

夜は、ほのかに明けてゐたし、傍らには、谷川が瀬音を立て、流れてゐるのが分つてゐた。咽喉は火のやうに渴いて、一掬の水が欲しくてたまらない。それなのに、谷川の傍まで這ひ寄つて、一掬ひの水を飲むことも出来ない。

(このまゝ、斯うして死ぬのだらう。)

それよりほかはないやうな氣がして、觀念して眼を閉ぢると、谷川の水のせゝらぎばかりが、際立つて耳につく。

(あゝ、水がほしい……一眼でもいいから、宮内さんに逢ひたいわ。宮内さん……宮内さんどうしてゐらつしやるの?)

切れぐに、そんなことを切なく思つてゐるうちに、眠るともなく、氣を失ふともなく、また、次第に氣が遠くなつて、何もわからなくなつてしまつた。

美登里が、氣が附いた時には、この山奥の炭焼小屋の片隅に寝かされて、枕もとには、やさしさうなお婆さんが、付き添つてゐてくれた。

あのまゝにしておかれたら、もちろん人通りのない山の中の谷底である。餓え死ぬか、熊の餌食にでもなつてしまふよりほかはなかつたところを、奇蹟的に助かることが出来たのである。それは、七日に一度か、十日に一度くらゐ、木を伐りに行く炭焼小屋の老人に、偶然発見され、背中に負ふはれて、連れて來られたのである。

まことに危いところだつたが、それでも美登里は、自分が助かつたのだといふことが分つた時に、先づ第一番に頭に閃めくやうに感じたことは、

(あゝ、うれしい。これで、宮内さんに逢へるのだわ！)

といふことだつた。

助かることは助かつたけれども、しかし、氣力だけ回復したら、すぐに起き出すといふわけにはいかなかつた。

谷底にころげ落ちる時に、木の根、岩角などに打つかつたのだらう。身體中の方々に、打撲傷だの、擦過傷だのを受けてゐた。それから皮下出血などもしてゐる上に、右の脚に骨折があつて、それがナカナカ癒らなかつた。金もなし、不自由な山奥の炭焼小屋のことではあり、治療に十分の手を盡すといふわけにも行かないのである。

それに美登里としては、何よりも恐ろしかつたことは、自分は人を傷つけ、或ひは殺したかも知れない身で、追はれてゐるのだといふことだつた。治療のために町に出て行つたり、町から醫者を迎へたりすると、いつ捕まつてしまふか知れないといふ恐怖があつて、その恐怖が美登里に、十分の治療もさせないのであつた。

舊式な民間療法で、しかし、深切な炭焼の老人夫婦の手厚い看護で、それでも美登里が、やうやく全快したのは、それから三月も後のことであつた。が、全快はしても、右脚の骨折が、完全に元の通りにはならないで、輕微な跛になつた。

左程眼立つといふほどではないが、しかし、生れも附かない片輪者になつてしまつたのである。

(S.W. わたしが跛になつたからと云つて、それで急に、わたしを嫌ひになるやうな宮内さんではないから。)

と思つて美登里は、我が身の不具を切かに慰めた。

(早く逢ひたい！逢つたらあの方の胸に顔を埋めて、思ふさま泣かして貰はう。さうしたら、辛かつたことも、苦しかつたことも、拭ひ取るやうに、忘れてしまふに違ひないから。)

全快したとなると、美登里は一日として、こんな山の中に、じつとしてはゐられなかつた。

東京へ！ 東京へ！
心は東京に飛び、戀しい愼之助の上に走るのを、どうすることも出来なかつた。

三

『いろ／＼お世話になりました。このご恩は一生、忘れませんから。』

汽車に乗つてから美登里が、また改めて、繰返して言へば、わざわざ送つて来てくれた炭焼小屋のお爺さんは、

『氣を付けてな。』

と、何遍も／＼言つたことを、また、涙ぐんで言つた。

『東京に行つても、辛いことばかりだつたら、遠慮はいらねえからな。いつでも歸つて來ることだよ。』

『ありがたうございます。』

『婆さんと二人で、待つてゐるだから。どうも他人のやうな氣がしねえだよ。孫でも出來たやうに思つてゐたのに。』

と言つて、素朴な、人情に厚いお爺さんは、手の甲で、涙を押し拭つた。

『……………』

美登里は、何んにも言へないで、咽び泣いてゐた。

そのうち汽笛が鳴つて、汽車はうごき出した。

十餘時間といふ汽車に揺られてゐる長い時間は、美登里には、二日も四日も、イヤ、一ヶ月も二ヶ月もの、長い／＼間のやうに感じられた。

(東京に行きさへすれば！)

と、虹のやうな希望を描いて、やうやく上野驛に着いたのであつたが、さて、汽車から降りても、どうしたらいいのか、はたと當惑してしまつた。――

女の敵意

一

憧がれの東京！

美登里は、初めて大都會の玄關ともいふべき上野驛の前に立つて、しばらくの間はなすところも知らず、呆然としてしまつた。まるで光の海、人間の渦巻きである。電車のひびき、自動車のサイレン、そして取りとめもない都會の騒音は、さながら大きな蜂の巢でも突ツついたやう！ たゞ、さうして立つてゐるだけで、頭腦がポーツとなり、クラ／＼と眩暈がしさうになつて來

る……

『もし〜。』

一人の男が、馴れ〜しく聲をかけて、近づいて来た。

『わたし？』

美登里がびつくりして聞くと、男は笑顔をつくつて、

『どうしたの？』

と、やさしく言つた。

眉の上のところに、大きな傷痕があつて、見るからに人相の好くない、感じのわるい男である。

『……………』

美登里は、どうしてこんな見も知らない男が、自分に親しさに話しかけたりするのか、さつぱり理由がわからず、黙つて、ぼんやりしてゐた。

『誰も、迎ひの人は來てゐないの？』

『え〜。』

『どこへ行くの？』

聞きながらも男の鋭い、氣味のわるい眼がジロ〜と、美登里の頭のでつべんから、足の爪先まで、見上げ見下ろして、観察してゐるのであつた。

『わたし、澁谷まで、行くんですけれども……』

と、美登里が正直に答へると、男は大袈裟に驚いたやうなふりをして、血走つたやうに、どんより濁つてゐる眼を、大きく見張つて、

『ほう。』

と言つたが、

『そいつは大へんだ。』

と、つぶやいて、濃い毛虫眉を、ひそめて見せた。

『遠いの？』

美登里が聞くと、男は仔細らしく頷づいて見せて、

『遠いも遠いが、とにかく、澁谷までなんて、大へんだよ。』

と、言つた。

『どうして？』

美登里には、その大へんの意味が分らない。

『君は、東京へ来たのは、初めてなんだらう？』
『ええ。』

『それぢや、これから一人で、澁谷まで行くのは大へんだ。』
『大丈夫だわ。』

『しかし、東京は危険だからな。氣を附けないと——』
『ありがたう。』

『僕が、送つて行つて上げようか。』

深切に言はれると美登里は、かへつて氣味がわるく、
『いいわ。——そんなことをして貰はなくても。』

と言つて、尻込みした。
いつまでも、こんな男にかゝり合つてゐないで、早く、逃げたいと思つたが、男は次第に圖うくしく、

『そんなに遠慮しなくたつて、いいぢやないか。』

と言ひながら、美登里の前に廻つて、立ちふさがるやうにした。

美登里は、氣味がわるいよりも、次第に恐ろしくなつた。

『ぢや、わたし、行きますから。』

澁谷に行くのは、どうしたらいいのかも分らずに、美登里が賑やかな往來のはうに歩き出すと、

『逃げる氣か。』

急に男は、氣味のわるい怒氣を含んだ聲で、威しつけるやうに叫んで、美登里を追つかけて来た。

『……………』

美登里はドキリとして、色を失つて立ちすくんでゐると、そこへ一人の警官が、つかくと進んで来た。

『あつ。』

男は、靴の音に振りかへつたが、警官の姿を見ると、さつと顔色を変へて、低い叫び聲を洩らすと、そのまゝ雲を霞と、逃げ失せてしまつた。

美登里は、やつぱり警官の姿を見ると、冷りとして、その瞬間、冷たい汗を背筋ににじませながら、

(もう、手が廻つてゐるのか?)

と、思つて着せめ、わななきながら立ちすくんでゐた。

二

澁谷のアパートだけは分つてゐるけれども、そこに果して今でも、青木先生がゐるものやら、それとも、既に、どこかに引越してしまつたものやら、美登里には、まるきり見當も附かなかつた。

青木先生が上京して、住所が決まると、すぐに知らせてくれたのを、覚えてゐるだけで、東京に出て来ても、美登里はそこよりほかには、行くべき當ても、手頼るべき人もなかつた。(いい工合に、青木先生がゐて下さるといいが。)

美登里は、省線電車に揺られてゐる間も、そればかりが心配だつた。

(もう、あれから半年以上の月日が、過ぎてゐるのだもの。)

と思ふと、今でも同じところにあるものやら、それとも、既にゐなくなつてしまつたものやら……考へれば考へるほど、不安だつた。

何しろ故郷を出てから既に幾ヶ月、美登里は故郷の便りなど、ちつとも知る機会がなかつたし、況んや青木先生の消息など、わかるはずもなかつた。

だから美登里は、もう半年以上も前に知らせて貰つた住所を唯一の手頼りに、さつきの警官か

ら教へられた通りに、とにかく澁谷まで省線電車に乗つた。澁谷驛で電車を降りると、それから驛の傍の交番で聞いた。

すると、道玄坂上の春仙荘アパートは、すぐにわかつた。

廣い通りから、ちよつと左に折れると、一丁ばかり行つた右側に、大きな三階建の洋館の建物が、美登里の眼には聳えるやうな感じで、建つてゐた。

四五段の石段を上つて、玄關を入つてゆくと、右のところに管理人の控へ室があつた。そこが受付のやうになつてゐたが、美登里が入つて行つた時、そこには誰の姿も見えなかつた。

『お免下さす。』

おづ／＼と、一二度呼んで見たが、返事もなかつた。

美登里は、だん／＼心細くなつて、途方に暮れたが、

『お免下さす。』

と、もう一度呼んだ。その時、一人の青年紳士が、つか／＼と二階から降りて来たが、そこに、しよんぼり立つてゐる美登里の姿を見ると、

「誰か、訪ねていらしたんですか？」

と、やさしく聞いた。

『はあ。』

美登里は、さつき上野のステーションで、見知らぬ男には懲り／＼してゐるのだが、でも、この際は救はれたやうに、ホツと安心した。

『受付に、誰もゐないんですね。』

同情するやうに、青年紳士が言つた時、ちやうど一人の若い女が、奥のはうから出て來た。

『珠ちゃん、お客さんぢやないか。』

と言つておいて、その青年紳士は、さつさと出て行つた。

『入らつしやう。』

若い女は、つか／＼と美登里の前に來て立つた。

紺色のスーツを着て、パーマネント・ウェーブといふのだらう。斷髪の毛を美しく波打たせてゐるし、アイシャドウや、ルウジエを使つて、美登里などが見ると、まるで壓倒されるやうな美しさにかゞやいた化粧をしてゐるのである。

『ちよつと、お尋ねいたしますが……こちらに、青木先生が、ゐらつしやるでせうか。』

美登里は、それを確かめるのは、何んだか怖いやうな氣もしたけれども、でも、聞かすにはゐられなかつた。

『あなたは、青木さんを、訪ねていらしたの？』

若い女の表情は、青木と聞くと、なぜかさつと變つたが、ゐるとか、ゐないとか返事をする前に、硬張つたやうな調子で、問ひ返へした。

『えへ。』

『畫を描く青木さんの？』

『さうですわ。』

『まあ。』

『ゐらつしやるでせうか？』

美登里は、自づから一生懸命になつて、息を吞ますにはゐられなかつた。そして、何と答へるかを待ちながら、その女の紅い唇が動くのを、見まもつてゐたが、女は、ナカ／＼答へなかつた。

三

『青木先生は、ゐらつしやるのでせうか？』

美登里は、いつまで待つてゐても、相手の女が、何とも返事をしてくれないので、たうとう堪りかねて、もう一度自分のはうから聞いた。

『おらつしやらないわ。』

若い女は、つんとして答へた。

『えつ、おらつしやらないのですか。』

と言つたが美登里は、がっかりして倒れさうになつたのを、その受付に掴まるやうにして、やうやく身を支へた。

『……………』

若い女は、青木がゐないと聞いて、美登里がひどく打撃を受けた有様を見ると、餘計、腹を立てたやうに、冷やかにジロリと見て、そのまゝ黙つて、さつさと奥に引つ込んで行かうとした。

『あの、ちよつと待つて。』
美登里は、あわてゝ呼びとめた。——なぜ、その若い女が、自分にこんなに敵意を見せるのか、理由は何も分らなかつたけれども、絶望の上に、更になしみ、彼女の胸をいつばいにした。

『まだ、何かご用？』

若い女は、冷淡に言つて、仕方なさうに立ちどまつた。

『青木先生から、こゝにゐるからといつて、お手紙をいたゞいて、伺つたのですけれども。』

『でも、今はおらつしやらないのですもの。仕方がないわ。』

『もうこのアパートには、おらつしやらないのでせうか？』

美登里は、必死だつた。

『……………』

でも、若い女は、黙つてゐた。

『それとも、今だけ、お留守なんでせうか？』

『お留守なのよ。』

若い女は、不承不承に答へた。

『さう。』

美登里は救はれたやうに、初めて顔色を明るくして、

『いつ頃、お歸りになりますの？』

と、聞いた。

『分りませんわ。』

『どうして？』

『晝を描きに、旅行にお出かけになつたのですから。』

「まあ。」

それでは、いつ頃歸つて来るかわからないのも、無理がないと思つた。

折角、東京に出て来ても、手頼りにしてゐる唯一の人が、旅行に出かけてゐないとは！ 何といふ廻り合せのわるい自分だらうと、美登里は今にも、泣き出しさうになつた。

「それで、ご旅行には、いつお出かけになりましたの？」
と、更に聞いた。

「三日ばかり前ですわ。」

「どちらに、行らしたのでせうか？」

「大島に行くと言つて、お出かけになりましたけれども。」

「向ふの宿屋は何といふ家か、おわかりになりましたか？」

「わかりませんわ。」

言ひすてると若い女は、そのまゝ奥に引つ込んでしまつた。

美登里は、どうしたらいいのか分らず、そこにぼんやり立ちすくんだまま、暫しは動くことも出来なかつた。

(さて、これからわたしは、どうしたらいいのかしら？)

と考へて見ても、どうすることも出来なかつた。

何より困まつたことは、懐中の極めて乏しいことだつた。

井上金之助から貰つた金は、A——温泉ですつかり山上のために捲き上げられてしまつた代りには、快氣ある彌榮吉といふ藝者から恵まれた情けの二十圓も、怪我をして寝てる間の小遣や、東京へ来る旅費などに、ほとんど遣ひ果してしまつた。今、がま口に残つてゐるのは、たしか三圓餘りしかないはずである。

これから大島まで、はる／＼と尋ねて行くにしても、東京に一時の宿を求めて、青木が歸つて来るのを待つにしても、心細い限りである。

美登里は、まつたく進退が極まつて、そこから一寸も動くことが出来ず、立ちつくしてゐた——

三原山の煙

美登里が、大島の元村に着いたのは、朝の五時だつた。

——いくら考へても、どうするといふ方針の立たなかつた彼女は、とにかく一應、青木先生に

會つて、相談するよりほかに、べつに、いい智慧も、分別も、浮ぶはすがなかつた。

青木先生の行衛が分らないのなら、それはそれで、また考へやうもあるのであつたが、とにかく、大島に行つてゐることだけは、確かである。

美登里は、自分だけの考へで、大島と言へば、狭いところのやうに思つた。たとへ宿屋の名がわからなくても、行つて探して見たら、分らないことはないやうな氣がした。何軒くらの宿屋があるか知らないけれども、一軒々々尋ねて廻つたところで、知れたものだらうと思つた。

どうなるにしても、とにかく、青木先生に會ふことだ。青木先生に會へば、或ひは慎之助の消息も、わかるかも知れない。——東京に出て來たことは分つてゐても、空漠として雲を掴むやうな慎之助の行衛を探すよりも、先づ青木先生に會つて、何かと相談するのが上分別だと、決心するなり大島通ひの汽船に乗つた。

往復の切符を買つてしまふと、アトには一食分の代金も残らなかつた。——尋ねるだけ尋ねて、若し分らなかつた場合には、飲まず食はずで、また、東京へ歸つて來なければならぬ。

考へて見ると、心細い限りだつたが、しかし美登里は、決して悲觀はしなかつた。第一に、いよく東京に出て來たのだといふことが、何か彼女に希望を與へずには措かなかつた。

とにかく、東京には慎之助がゐるのだ。今はどこにゐるか、その居所はハツキリわからなくて

も、東京のどこかにゐるのだ！ 慎之助のゐる東京に出て來たといふことが、美登里には力強い希望を與へたし、しかも、青木先生の居所だけは分つたのだ。アパートにゐなくて、生憎旅行中だといふことは、すこし不幸だつたけれども、それにしても大島に旅行してゐるといふことだけは、わかつたのだ。

美登里は、青木先生に會つて、相談して見ないうちは、自分だけではどうすることも出来ないで、やうやく、ありたけの金を出して、大島までの往復切符を買つたのである。

今となつては、一日や二日くらゐ、食ふとか食はないとかは、美登里にとつては問題ではなかつた。心細いことは心細くても、氣持だけは張り切つてゐた。

五時といつても、秋の朝のことで、まだ、日は出てゐなかつた。空や、海が、曉の光りに、次第にほのかな明るさを加へつゝあつた。——デッキに立つて見ると、すぐ眼の前に、島といふよりも、大きな山が、黒々と聳えてゐた。

名だけは聞いてゐても、美登里は初めて見る三原山である。眼の前の高い山の頂上から、黒い煙が吹いて、ほのかに明るくなつて行く晴れ渡つた空に、美しく棚引いてゐるのであつた。

(あゝ、三原山だわ。)

美登里は、黒い噴煙を見つめつゝ、思はずさう眩かすにはゐられなかつた。——はるくと大

島まで渡つて来て、三原山の棚引く煙を、この眼で親しく見るなんて！美登里は、何だか夢でも見てゐるやうな、不思議な気がした。

そのうち、汽船は留つて、がら／＼と鉦を下ろす音がひゞいた。デツキには、大島で降りる客が三十人あまり上つて来て、ガヤ／＼してゐた。

すこし離れた棧橋には、ポツリ／＼と、電気が瞬いてゐる。舳舟が二艘、汽船を眼がけて、漕ぎ出して来た。

二

『大島つて、広いでせうか？』

美登里は、棧橋にあがると、そこに誰かを出迎ひにでも来てゐるらしい、土地の老人に聞いた。

『大島は、狭いやうだが、相當に広いな。この元村のほかに、波浮もあれば、岡本もあるからな。』

と、老人は答へた。

『だが、元村だけなら、大して広いとは言へないな。』

『波浮とか、岡本といふのは、こゝから遠く、離れてゐますの？』

『相當離れてゐるな。』

『それで元村には、宿屋は幾軒もございますの？』

『四五軒はあるね。』

『どうも、ありがたう。』

美登里がお禮を言つて、そのまゝ行かうとすると、

『大島見物かな？』

と、老人が聞いた。

『いゝえ。——探す人があるものですから。』

美登里は、立ちどまつて答へた。

『どんな人を探すだね？』

『畫を描く人ですわ。』

『畫描さんか。』

老人は言つて、

『東京から来た人かね？』

と、聞いた。

『えい。』

美登里は頷いてから、

『心當りがありますか？』

と、胸を躍らして聞いた。

『何といふ人だね？』

『青木先生と、おつしやるんですけれども……』

『あゝ、青木さんかね。』

『知つてゐらつしやるの？』

『青木さんといふ畫描さんなら、三四日前から、東京から來てゐるね。』

『では、どこにゐらつしやるのでせう？ お爺さんここにゐらつしやるの？』

美登里は、急ぎ込んで聞かすにはゐられなかつた。

こんなところで、こんな工合に、偶然、聞いて見たこの老人が、青木のゐるところを知つてゐるなんて！ 何だか夢のやうな氣がすると同時に、神佛の加護ではないかといふ氣がした。

『イヤ、わしの家にゐるわけぢやないが……二三軒向ふの荒物屋に來てゐる畫描きさんが、たしかに青木さんとかいつたやうに思ふがね。』

『ありがたう。』

美登里は、思はず老人の前に、頭を下げずにはゐられなかつた。

『それで、その家は、何といふ家でせうか？ で——どちらへまゐつたら、いいのでせうか？』

『さうだな。——わしも、これから直ぐに歸るだから、ちよつとその家まで、送つて行つてやる

へ。』

老人は深切に言つたが、艇舟の中の人々は、既に全部、棧橋に上つてしまつたのに、老人が、わざ／＼迎ひに出て來た人の姿は、見えなかつた。

『また、この汽船でも、たうとう歸つて來なかつた。』

老人は、かなしさうにつぶやいて、溜息をついた。

『たつた一人の娘がの、二年ばかり前に、家を飛び出して、東京に逃げて行つたが、父なし子を生んで、路頭に迷つた果が、一旦、捨て、出た家に歸つて來たいからと詫びて來たのでな。わしも、ただ一人の可愛い娘のことな、許してやることにして、戻つて來るやうに言つてやつたところが、娘からも喜んで、すぐに歸つて來るからと、手紙だけ來てから一週間にもなるのに、まだ、歸つて來ない。』

老人は、石ころの轉がつてゐる歩きにくい、だら／＼の坂道を上りながら、問ひもしないの

に、一人で喋つた。

「娘のその手紙を見てから、わしは毎日、汽船が着く度に、斯うして汽船着き場まで、一週間は迎ひに出てゐるだよ。——自分の勝手で、家を飛び出して行つて、父なし子まで連れて戻つて来るのでは、せめて迎ひにでも出てゐてやらないと、定めて敷居が餘り高いので、一人では跨ぎにくいだらうと思つてな。」

と言つて、或る一軒の家の前に立ちどまつたが、

「これが、親馬鹿といふものだらうが、どうも不しだらな子を持つた親の因果で、仕方がないな。はは、ムム。——さあ。来たよ。こゝが、その荒物屋だからな。まだ、寝てゐるから、たたき起さにやならないが、ちよつと、わしが起してやるべ。」

と言つて老人は、雨戸の傍に寄つてゆくと、とん／＼と叩き初めた。

美登里は、次第に明けゆく朝の光りの中に佇すんでゐたが、老人の深切が、ひし／＼と胸に沁みると同時に、問はず語りの娘の話は、身につまされて、心が痛んだ。——その後の父や、繼母や、利一郎などのことを、考へずにはゐられなかつた。

「東京から來てゐる畫描きさんに、お客さんだよ。」

内から雨戸が一枚、がら／＼と繰りあげられて、お内儀さんらしい女の顔が覗くと、老人が言

つた。

三

「たうとう、やつて來たな。——それでも、僕を忘れないで、よく尋ねて來てくれたものだな。もちろん青木は、まだ寝てゐるところを起されたのだが、急いで顔を洗つて來ると、チェリーの煙りをうまさうに吹かしながら、ニコニコして言つた。

「澁谷のアパートに寄つて、僕が、こゝにゐることを知つたのだね。」

「え。」

と、美登里は頷いたが、

「でも、お宿がわからないものですから、どうしたらいいかと思つて、ずるぶん考へたんですけれども。」

「何、宿がわからなかつたつて？」

「はあ。」

「アパートの管理人に聞けば、すぐに分つたのに。」

「あら、若い女の人に、聞いたんですけれども……」

「若い女の人？」